僕だけがいない街 case file1

I N D E X

人物調査書 P4

事件周辺見取り図 P18

各話考察（第一話-第四話） P22

リバイバル・クロノロジー P40

各話考察（第五話-第六話） P46

絵コンテのトリック P56

アフレコ再上映（リバイバル）① P62

三部けい（原作）×松宮庸典（担当編集）インタビュー P63

アフレコ再上映（リバイバル）② P76

シリーズ構成　岸本卓インタビュー P77

アフレコ再上映（リバイバル）③ P85

オリジナル・サウンドトラック1 P86

藤沼悟

CV:土屋太鳳(昭和63年)
満島真之介(2006年)

29歳、漫画家。2006年現在はピザ屋にてアルバイト中。他人との間に距離を置き、深く関わることを避ける性格のようで、それが災いしてか漫画家として今ひとつ芽が出ない。リバイバル(再上映)という現象に悩まされており、それがために様々なトラブルを回避してきた。だが、母親を殺害された後にこれまで経験したことのない大きなリバイバルに遭遇。昭和63年へと飛ばされることになる。

ヒーローのお面

悟の回想にたびたび登場するヒーローのお面。昭和63年当時の悟の家にも飾ってあった。このヒーローは、彼にとって特別な存在であるようだ。

SATORU FUJINUMA

リバイバル

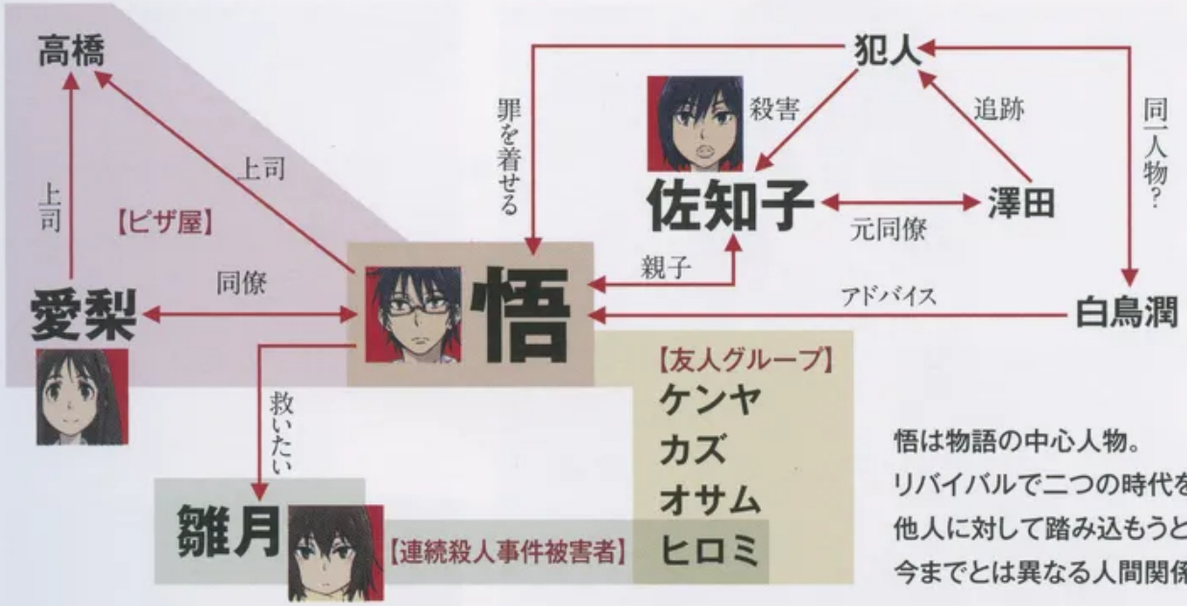
悟に訪れるリバイバルという現象は、過去に戻ってやり直しが利くという意味で、トラブルの回避にはこれ以上ないほどの武器になり得る。だが18年もの時を隔てたリバイバルは、悟にも初めての経験のようだ。大人の知識を持ったまま小学生時代をやり直すことは、事件解決に有利にはたらくように見えるが…。

踏み込むということ

「雛月に声をかけていれば助かったかもしれない」という幼い頃の後悔から、いつの間にか「踏み込めない」大人になってしまっていた悟。傷つくのを怖れるその防衛的心理は、子ども時代の心の傷の大きさの裏返しでもある。しかし昭和63年へのリバイバルによって、彼は意識的に「踏み込む」行動をとり始める。

「声に出てた…」

人に踏み込めない一方で、悟は内心で思ったことを、不用意にそのまま口に出してしまうクセがある。だが、逆にそれがいい結果を生むことも。



悟は物語の中心人物。
リバイバルで二つの時代を行き来している中、
他人に対して踏み込もうという意志を持ったことで、
今までとは異なる人間関係が生まれている。

【藤沼悟を中心とした事件整理】

藤沼悟は、2006年現在、母親である佐知子殺害の容疑者であり、警察から逃亡している身だ。同時に、リバイバル後の昭和63年においては彼自身が事件を追う主体でもあり、複雑な立場に置かれている。リバイバルし、18年前に起こった連続殺人事件が母親の死の起点になると考えた彼は、最初に狙われるはずの雛月加代を生存させることで母を救おうとする。だが、結果雛月は殺害され、歴史改変は失敗。そのため再度2006年に戻ることとなった。その後、ルポライター・澤田と愛梨の協力によって、狡猾な犯人の人物像とやり口を知り、西園という男へと辿りつくが、警察に捕まってしまう。そして——。

雛月加代

CV:悠木碧

昭和63年、悟のクラスメートだった少女。小学生連続誘拐殺人事件における最初の被害者となる。母親と暮らしており、家はそれほど裕福ではないようだ。無愛想で人付き合いもいいとは言えず、友人と呼べる人間もいない。そんな彼女は、学校からの帰り道、いつも公園にひとりでいるようだが……？

雛月の足にあった不自然な痣に気がついた悟は、事件以前から彼女の身に何かが起きていることを感じ取る。

KAYO HINAZUKI

雛月加代にまつわる3つのポイント

「バカなの？」

無愛想な雛月をさらに近寄りがたくする口癖。言葉自体は冷たいが、状況によってそのニュアンスが少し変化する。

「演じているうちに本当になる気がするよ」

虐待を受けていた雛月は、何も感じない自分を演じようとしていた。だが、幼い彼女がそんなに強いわけがない。悟はこの言葉を受け、雛月を救うことを改めて胸に誓う。

誕生日

雛月の誕生日は悟と同じ3月2日だった。彼女が失踪するのは、誕生日より前かつ3月ということが分かっている。そのことから、事件のXデーが3月1日であったことが発覚した。

月加代にまつわる3つのポイント

バカなの?」

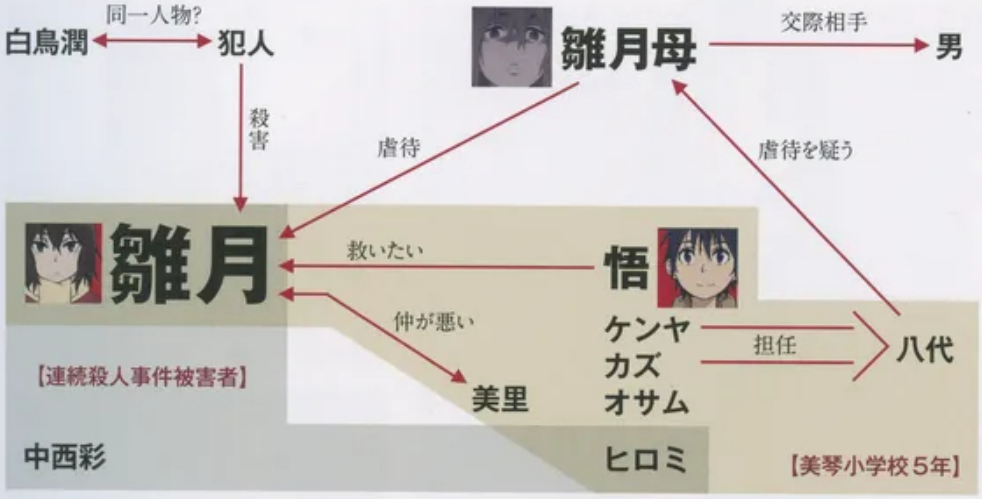
想な雛月をさらに近寄りがたくする口癖。言自体は冷たいが、状況によってそのニュアンス少し変化する。

演じているうちに
本当になる気がするよ」

待を受けていた雛月は、何も感じない自分を演うとしていた。だが、幼い彼女がそんなに強いけがない。悟はこの言葉を受け、雛月を救うこと めて胸に誓う。

誕生日

月の誕生日は悟と同じ3月2日だった。彼女が失するのは、誕生日より前かつ3月ということが分っている。そのことから、事件のXデーが3月1日うったことが発覚した。



友達付き合いが苦手な雛月は、
周りとそれほど多くの関係性を持たなかった。
そんな彼女にもリバイバル後の悟の行動によって、
幾人かの友人ができることになる。

【雛月加代を中心とした事件整理】

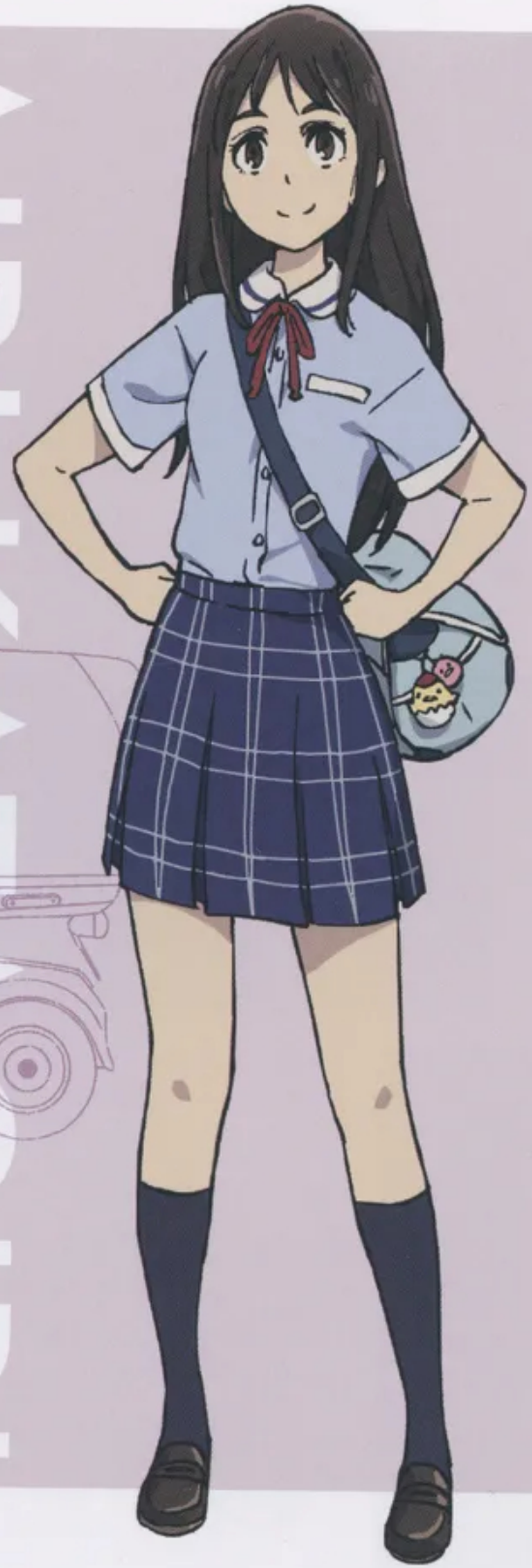
小学生連続誘拐殺人事件の最初の被害者、雛月加代。母親からの虐待を避けるため、学校からの帰り道、公園にいることが日課となっていた彼女は、3月1日、何者かによって誘拐される。その一ヶ月後に遺体となって、不法投棄された冷蔵庫の中から見つかった。悟のリバイバル後において、彼女は以前とは少し違う運命を辿る。2月16日、声を掛けられたことをきっかけに、彼女は悟と共に行動することとなる。Xデーである3月1日は共に児童館へ行き、犯人の魔手を回避。だが、翌日の3月2日、自身と悟との誕生日会の後、彼女は母親とその交際相手によって暴行を受け、自宅物置に閉じ込められてしまう。さらに夜の間に何者かによって連れさられ、翌日の3月3日早朝には、亡骸が物置に戻された。

片桐愛梨

CV:赤﨑千夏

悟のアルバイト先であるピザ屋の同僚。高校生。明るく人と接する性格で、悟とも気兼ねなく話をする。悟の交通事故を目撃したことをきっかけに、彼と深く関わっていくこととなる。

悟を救い、一旦家に戻った愛梨は突然のメールにたじろぐ。一見悟からに見えたその内容は、犯人からのものだった。悟に救われた際、彼女は自身の携帯電話を彼のポケットに忍ばせる…。



片桐愛梨にまつわる3つのポイント

夢を持つ少女

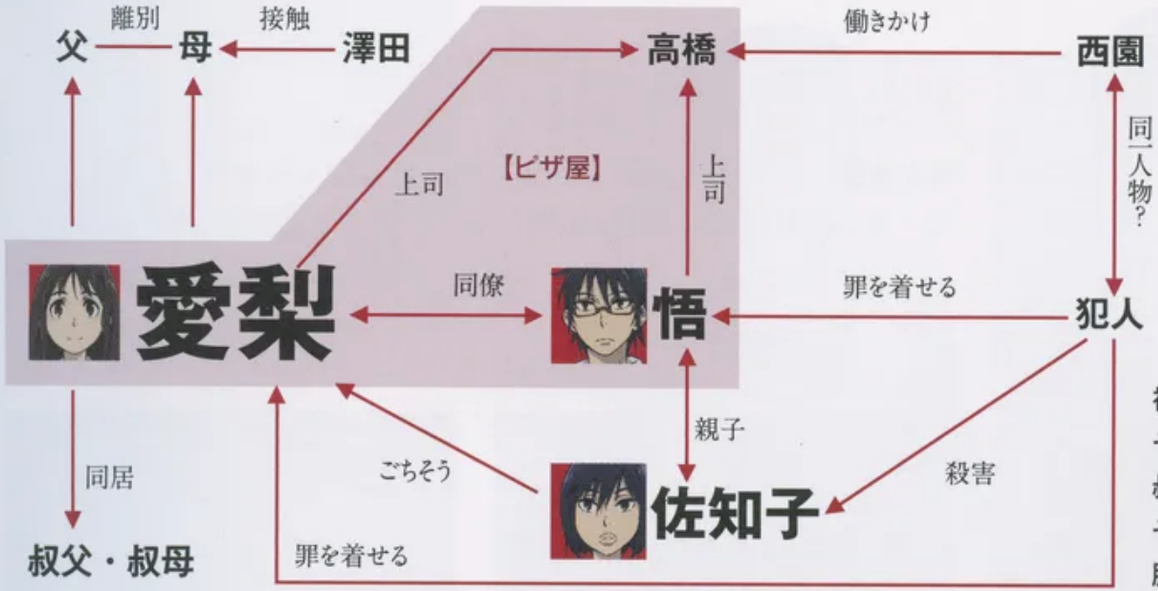
交通事故で入院していた悟から、なぜアルバイトしているのかを問われ「自分には夢がある」と話す愛梨。それ以上のことは教えなかった彼女だが、夢の内容はいずれ明かされるのだろうか。

愛梨の両親

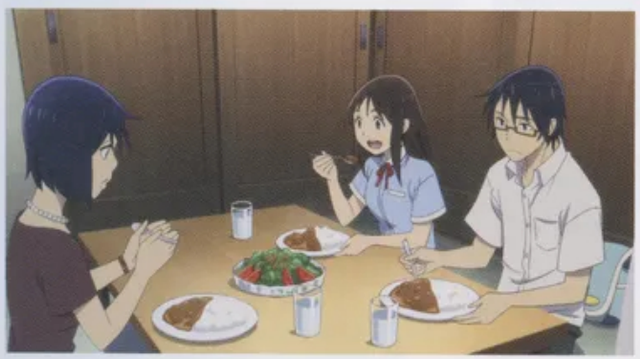
愛梨の父親は彼女が小さい頃に離別。その理由は父が万引き事件の犯人として疑われたことがきっかけだ。愛梨の母は彼の無実を信じられなかったようだが、今ではそれを後悔している。愛梨が住んでいる家には、「佐々岡」という表札が掛けられていた。これは彼女が叔父と叔母の家から高校に通っているためだ。

「信じられる」じゃなく「信じたい」

第5話で警察に通報しようとした高橋店長を、愛梨は容赦なく打ちのめした。いつもにこやかな愛梨からは想像できない反応だが、「信じたい」という気持ちを裏切られたことで、激しい感情となって現われたようだ。



複雑な家庭環境を持つ愛梨。
そんな彼女を受け入れてくれた叔父、
叔母には感謝をしているが、
その二人にさえも悟の無実を信じてもらえず
胸を痛める。



【片桐愛梨を中心とした事件整理】

片桐愛梨は、2006年で藤沼悟がアルバイトをしているピザ屋の同僚だ。悟がリバイバルを終え2006年に戻ってきた際、容疑者として追われる彼を救い、自宅へと匿った。しかしアルバイト先の店長である高橋にその現場を見られ、逃亡。着替えなどを取ってくるため、彼女のみ自宅に戻ったところ、何者かによって家に火を放たれる。悟と高橋店長によって命を救われた彼女は病院に運ばれる。悟との関係や佐知子とも面識があることなどから、佐知子殺害の共犯である可能性を疑われ、入院中も警察に監視されていた。病院を抜け出し悟と落ち合う愛梨だが、その背後には……。

佐知子のメモ

佐知子が元同僚である澤田の電話番号を書いたメモ。玄関に置きっぱなしにしていたものを、悟が拾っている。

SACHIKO FUJIJIMA

藤沼佐知子 CV:高山みなみ

悟の母親。2006年時点で52歳だが、実年齢よりも若く見える。
元・テレビ石狩の報道部アナウンサーで、鋭い観察眼を持っている。

藤沼佐知子にまつわる2つのポイント

「冗談に決まってるべさ」

佐知子の口癖。スーパー駐車場での誘拐事件が未遂に終わった際や、昭和63年で悟の後を密かにつけた際にこの言葉を使用した。どちらも本当のことをごまかすための方便なので、佐知子がこの言葉を使う時は、事実である前提だと考えてよいだろう。

元・テレビ局報道部

悟が「サトリみたい」と動揺するほど洞察力が鋭い佐知子は、かつてテレビ石狩の報道部にいたことがある。同僚だった社会部記者である澤田に働きかけるなど、当時の人脈を活かして事件を探ることもできた。

【藤沼佐知子を中心とした事件整理】

藤沼佐知子は昭和63年に起こった小学生連続誘拐殺人事件の際、参考人だった藤沼悟の母親として、事件と向き合った。だが、悟からの「犯人は白鳥潤ではない」という言葉を信じきることができず、むしろ事件から彼を遠ざけようとする。その際、澤田に対して報道規制を敷くよう要請。だが、この事件は彼女自身の心にも引っかかりとして残っていた……。2006年、悟のリバイバルをきっかけとして、誘拐事件を未然に防いだ佐知子は、少女を連れ去ろうとした男に覚えがあった。昭和63年の事件との関連性に気がついた彼女はふたたび連続殺人事件の真犯人について洗い直そうとするが、その矢先、何者かの手によって殺害されてしまうのだった。

JUN SHIRATORI

白鳥潤(ユウキさん)
CV:水島大宙

昭和63年、悟を始め、ひとりになりがちな子供たちに声をかけ、相談に乗っていた青年。「勇気」という言葉を繰り返し口癖にしていたことから悟には「ユウキさん」と呼ばれていた。小学生連続誘拐殺人事件の犯人として逮捕されることになる。

白鳥潤にまつわる2つのポイント

弁当屋のアルバイト

昼間、河原や公園によくいた彼だったが、無職というわけではなかった。朝4時から昼までの間は、父親の仕出し弁当屋でアルバイトをしていたという。

父親想い

彼は父親想いだった。だがそれが災いして、犯人として疑われた際、自分の父親が犯人である可能性を考え、アリバイ、物証に関して黙秘し続けた。結果として警察からの印象はさらに悪くなってしまった。

白鳥潤の趣味はペーパークラフト。彼が河川敷によくいたのも、これを飛ばすためだろう。悟にもよくコツを教えていたようだ。

【白鳥潤を中心とした事件整理】

白鳥潤は小学生連続誘拐殺人事件の犯人とされており、確定死刑囚である。第5話でリバイバルから帰還した後、改変された2006年時点での澤田の調査によれば、彼は昭和63年3月2日、母親から暴行を受け、物置に閉じ込められた雛月加代を連れ去ったという。犯行手口は被害者に暴行を加え気絶させ、写真撮影をしたのちに業務用冷凍庫内で霧吹きを使い、急速に凍死させるというもの。その後雛月家の物置に凍死体を戻している。さらに3人目の被害者であるヒロミは女児と間違われて殺害されたと考えられることから、彼と面識のない白鳥潤は有力な犯人候補となった。最終的にヒロミ殺害時に撮影された写真が白鳥食品の倉庫から押収され、小児性愛の傾向にあると結論付けられた上で逮捕へと至った。

ケンヤ CV:大地 葉

悟のクラスメートで友人。
小学生離れした洞察力を持っている。
悟に何か思うところがあるようだが……。

【考察】

いつも的確な意見で場を取り持つことができる、リーダー的な存在のケンヤ。悟が雛月を気にしていることや、雛月と中西彩の失踪が連続誘拐事件ではないかといったことをいち早く見抜いた。時に悟にアドバイスをすることもあるケンヤだが、その視線の多くが悟に向けられていることに意味はあるのだろうか。

カズ CV:菊池幸利

悟のクラスメートで友人。
猪突猛進型のおせっかいやき。耳年増の面があるが、
異性との付き合い方を本当はよく分かっていないようだ。

【考察】

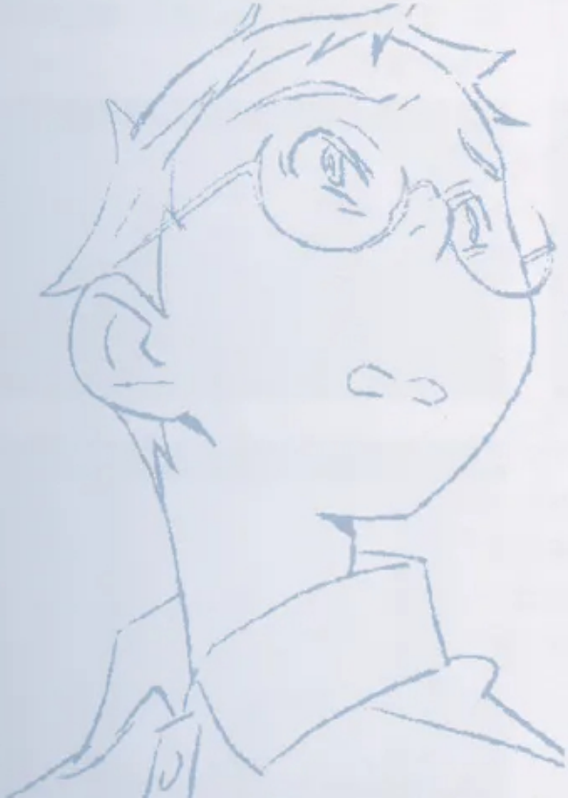
カズは悟の仲間達の中でも行動派で、悟と雛月との仲を（結果として）急接近させた功労者だ。だが、かなり直截的に話してしまったらしく、悟としてはバツが悪い気分も味わうこととなった。また、給食費紛失の際は、自分の持ち物を調べようとしなかったりと、曲がったことはしない性格のようだ。

オサム CV:七瀬彩夏

悟のクラスメートで友人。
明るく、率先して人に声を掛けることができる少年だが、
おっちょこちょいな一面もある。

【考察】

悟との登校時、彼が雛月に目をやっていることに気がついたりと、観察力がある反面、それをみんなに臆面もなく話してしまう。悟と雛月が科学センターに行く提案があった時にもすぐそれに乗ってしまうなど、グループの中では一番子供っぽさが残っている。



ヒロミ CV:鬼頭明里

悟のクラスメートで友人。
女の子のような顔立ちをしている。
照れ屋の面があり、他人の振る舞いを見て
「大胆だなぁ」と頬を赤らめてしまうこともある。

【考察】

小学生連続誘拐殺人事件の3人目の被害者。殺された3人の中でただひとりの男児。そのため、女の子と間違えられて殺されたとの見方が有力だが……。

雛月明美 CV:岡村明美

雛月加代の母親。道営住宅に母子ふたりで暮らしている。
夕方に出勤しているところから、
夜間に働いて生計を立てているようだ。

【考察】

加代に対し虐待を重ねている雛月の母だが、世間体を気にしているため、目立つ傷痕などは残さないようにしている。暴行するのも土曜日とし、月曜にある程度腫れなどが引いた状態で登校させていた。また、彼女には若い男の影があり、その男も酒飲みのどうしようもない性格であるようだ。雛月失踪の際に二人は一度容疑者として扱われたが、その後の捜査で白鳥潤の犯行であるという有力な証拠が見つかり、容疑者リストから外された。

八代学 CV:宮本充

美琴小学校の教師で、5年4組の担任。
優しく面倒見がいいため、生徒たちの人気も高い。同時に鋭い観察眼を持っており、生徒の異変にはいち早く気がつくことができる。

【考察】

八代は教師として子供たちに相対しているため、俯瞰で物事を捉えることができるようだ。雛月が虐待を受けていることについても、5年4組担任となった直後の5月には気が付いていた。すぐに児童相談所に連絡し、虐待をやめさせるため三度雛月の家へと担当者を派遣させている。それらは失敗に終わったが、春休みを待った上で、再度児童相談所に連絡するつもりだった。しかし、その前に雛月は何者かによって殺害されてしまう。

高橋店長 CV:竹内栄治

悟と愛梨がアルバイトをしているピザ屋の店長。
兄貴肌で頼りになるが、
そのために多少煙たがられることもある。

【考察】
リバイバル後、2006年に戻った悟が警察に追われていた際に頼ったのが高橋店長だった。だが、いくつかの局面で、彼は警察に通報しようとする。これは彼自身の正義感によるものと悟は考えた。しかし高橋の愛梨に対する執着を考えると、愛梨と悟の接近に気がついたことで生まれた嫉妬からの行動にも見える。

【考察】
リバイバル先の昭和63年において、悟は佐知子と澤田が会話しているところを目撃している。そこで澤田は佐知子の要請を受け、連続誘拐殺人事件についての報道規制を敷き、テレビ石狩ができるだけ事件を伝えないように手配した。だが一方で犯行を否認する白鳥容疑者が犯人であるとは思えなかったようで、独自に調査を続けていたらしい。2006年、リバイバル後の悟と出会い、彼に佐知子が真犯人に行き着いていたことと、犯人の狡猾な手口を教えた。

澤田 CV:大川透

元・テレビ石狩社会部の記者であり、2006年現在はルポライター。18年前の小学生連続誘拐殺人事件はまだ終わっていないと考えており、真相を究明しようとしている。

美里 CV:木野日菜

悟、雛月らのクラスメート。
雛月のことをあまり快く思っていない。

【考察】

以前雛月に自慢のシャーペンを窓から放り投げられたため、彼女のことを良く思っていない。給食費が紛失した際、真っ先に盗難と決めつけ各々の荷物を調べることを提案。雛月が給食費を持っていたことから、彼女を犯人だと吊るし上げようとする。だが、その一連の行動から、悟によって今度は盗難を捏造した張本人ではないかと疑惑の目を向けられてしまい……。

浜田

CV:吉田麻実

全国優勝を果たした
美琴小学校アイスホッケー部のレギュラー。
女子たちからも人気がある。

【考察】

悟とスケートで競争するも、僅差での勝利となる。だが、浜田は悟が手を抜いたことが分かっていた。そのため悟に対して激怒。その場から去ってしまう。

中西彩 CV:金子彩花

泉水小学校の５年生。
小学生連続誘拐殺人事件の二人目の犠牲者。

【考察】
家出をして祖父の家に行っているという話が流布していたが、それは地域の子供達を安心させるための方便で、実際は失踪であった。第6話までの時点で悟との面識はない。

帽子の男

深めに帽子を被っている眼鏡の男。悟が自宅へと戻る際にすれ違った。また、リバイバルを終え、2006年に戻ってきた悟が逮捕された際も、現場にいて悟を注視している。愛梨がアルバイト先のピザ屋で目撃した西園という男とよく似ているようだが……。

【考察】
悟のアパートの階段ですれ違ったことから、佐知子殺害の犯人だと思われる。佐知子は犯人の姿を見た時、「やはり」という思いを抱いているので、帽子の男は佐知子が調べた結果行き当たっていた誘拐事件の真犯人、または旧知の人物なのだろうか…。

❶美琴小学校

昭和63年時、悟が通っていた小学校。運動場に冬場はスケートリンクができる。悟のいるクラスは5年4組で、担任は八代学。

❷クリスマスツリーの丘

第3話で悟が「見せたいものがある」と雛月を連れてきた丘。雪化粧された大木をクリスマスツリーに見立てていた。

❸悟の家

昭和63年時、悟と佐知子が住んでいたアパート。雛月の家から割と近くにある。

昭和63年 小学生連続誘拐殺人事件周辺見取り図

ここでは、昭和63年北海道T市にて発生した連続誘拐殺人事件の、大まかな見取り図を掲載した。
どこで何が発生したかを俯瞰で見ることで、犯人の足取りの一端が見えてくるかもしれない。

❹雛月の家

雛月が母親と共に住んでいる道営住宅。五街区にある。

❺公園

雛月がいつもひとりで佇んでいた公園。第2話にて、悟が彼女を誕生日会に誘ったのもこの場所だった。

❻川

河川敷にはよく白鳥潤の姿があった。また、この川に沿ったところに悟達のアジトがある。

北海道T市
山
N
W
E
S
❷クリスマスツリーの丘
❻川
自動車道
❶美琴小学校
❺公園
バイパス道路
アジト
❸悟の家
❹雛月の家

第一話 走馬灯

藤沼悟。29歳。彼は自身の周囲で起こる不思議な現象「リバイバル（再上映）」を引き金に、アルバイト先で交通事故に遭ってしまう。幸い軽傷で済んだものの、心配してやってきた母親の佐知子と同居することに。二人で行ったスーパーの帰り道、佐知子はある異変を察知し、かつて起こった連続殺人事件の犯人へと行き当たる——。しかし、その犯人の名を告げる前に、彼女は何者かに殺害されてしまうのだった。帰宅した悟は、その姿を目撃され容疑者として警察に囲まれる。必死の思いで逃げ出した彼の前には、目を疑う風景が広がっていた。そこは18年前。かつて幼少時代を過ごした、昭和63年の北海道で——。

STAFF

脚本:岸本 卓
絵コンテ／演出:伊藤智彦
作画監督:佐々木啓悟

悟が帰宅直前にすれ違ったのは、佐知子を刺殺した帽子に眼鏡の男。佐知子は事切れる前に何かを確信していた。18年前の事件との繋がりは……?

和63年…?

リバイバルによる交通事故をきっかけにして、徐々に記憶の蓋が開いていく悟。母親の話から、昭和63年の小学生連続誘拐殺人事件について思い出し、改めて調べてみることに。

佐知子と二人で行ったスーパー前でリバイバルが発生。アイスを落とす子供、宙に舞う風船——だが違和感は見つからない。悟はついに佐知子に協力を乞う。辺りを見回した佐知子が見たものは……!?

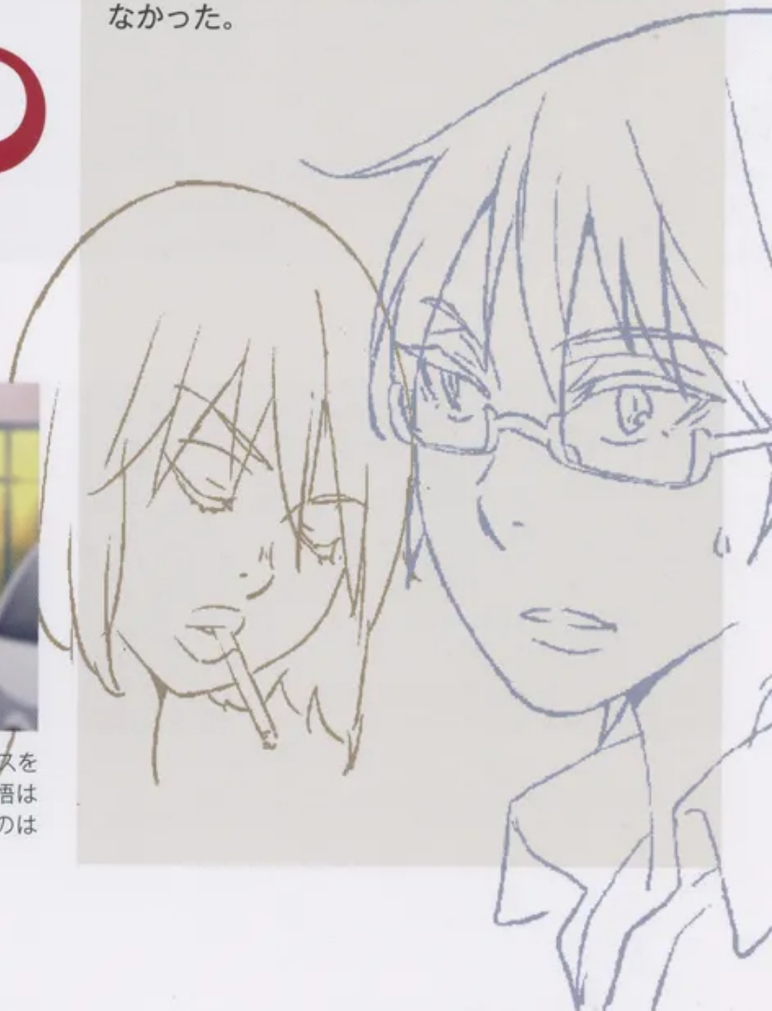
KEYWORD

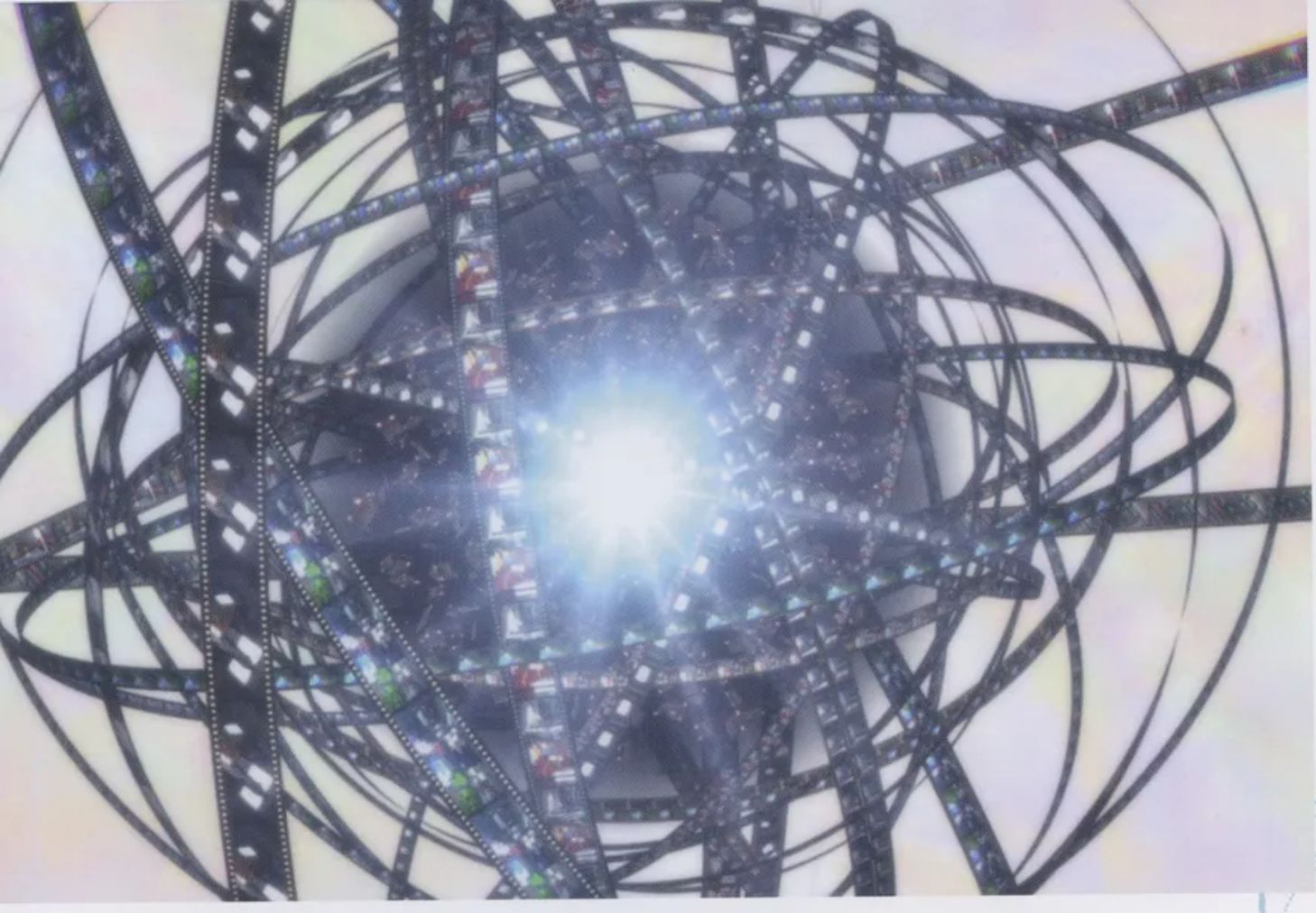
【悟と佐知子】

そのぶっきらぼうな接し方から、悟は佐知子に対して少し距離を置いていたことが推し量れる。佐知子がしばらく滞在することへの悟の驚きを見ると、上京した悟のアパートを訪れたことがなかったのかもしれない。

【平成生まれのジョークか】

愛梨の冗談めいた言葉を聞き、「平成生まれのジョークか」と言う悟。この物語の起点は2006年であり、平成生まれで高校生はまだ少なかった。





リバイバル(再上映)

悟の周囲で起こる特殊な現象――「リバイバル(再上映)」。それは、彼の近くで何か「悪い事」が起きる直前の1分～5分ほど前に時が巻き戻るという、悟にとって一種の時間跳躍とも呼べる現象だ。リバイバル前と同様の光景の中で違和感を探し、解消することでトラブルを回避することもできる。

リバイバルが起こった場合、必ずどこかにある「違和感」。それこそが、「悪い事」を引き起こす原因だ。

リバイバルによって何度もトラブルを回避してきた悟。だが、第1話で交通事故に遭ってしまったように、時に自身にとってマイナスになることも……。

第1話の最後に起こったリバイバルは、18年前に戻るという、これまで悟自身が経験したことのないほどの大規模なものだった。

北海道小学生連続誘拐殺人事件

18年前、悟の住んでいた北海道にて起こった事件。その容疑者となったのは、悟に対し親身に接してくれたユウキさん（白鳥潤）だった。悟は当時、彼が犯人ではないと主張したが、大人たちはそれを取り合わなかった。

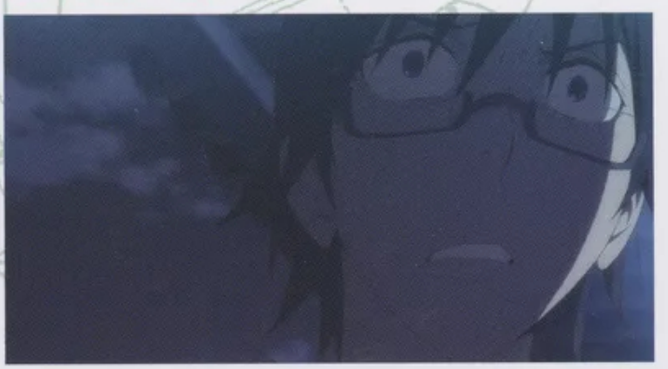
未遂に終わった誘拐事件

スーパーの駐車場で、突如発生するリバイバル。佐知子は少女と一緒に歩いている男に「見られていた」と感じ、注意を向ける。佐知子の視線に気付いた男は、少女を置いて立ち去るが……。

佐知子殺害

自分を見ていた男に覚えがあった佐知子は、思案を巡らせた末、18年前の連続誘拐殺人事件に関連した人物に行き当たる。だが彼女はそれを誰にも告げることができないまま殺害されるのだった。

容疑者は悟?



帰宅した悟を待っていたのは、佐知子の亡骸だった。愕然とする悟は、その姿を大家に見られてしまう。直後、考える間もなく警察が悟の自宅を取り囲み、彼は佐知子殺害の疑いをかけられるのだが……。

KEYWORD

【クラスメートが二人いなくなったんだった】

佐知子から誘拐事件の話を聞き、その時のことを思い出そうとする悟の言葉。ひとりは第1話で雛月加代という少女だと判明するが、もうひとりは……？

【佐知子の持ち物】

佐知子が持っていた紙のメモは、自宅に戻ってきた悟が回収。また、携帯電話は犯人と思しき男が持ち去ってしまった。

■制作こぼれ話

佐知子が読んでいる新聞などの「貼り込み素材」は、結構こだわっています。当時の世相を反映した記事も入れ込んでいますが、よく読むとちゃんと雛月の事件の詳細が書かれていたりするんです。後の話数まで見てもらって、また最初に戻ってもう一度見ると「ああ、そうだったのか」と思えるような工夫を、細かいところにもしているつもりです。

藤田祥雄（制作デスク）&渋谷晃尚（設定制作）

第二話 掌

突如として昭和63年に時間跳躍する悟。そこでは母が在りし日の姿のままでいた。悟は失ったはずの時間を噛み締めると共に、これがリバイバルであることを確信。「違和感」を探せば母を助けられるのではと考える。この後殺害されるはずの同級生・雛月加代こそが違和感の源ではと直感した悟は、彼女にアプローチを掛けた。すると、事件以前から彼女の身に何かが起きている感触が。さらに友人ケンヤの言葉をきっかけに開いた学級文集には、雛月の作文にSOSのメッセージがあった。「踏み込む」決意とともに悟は雛月を誕生日会に誘うのだった。

STAFF

脚本:岸本 卓
絵コンテ／演出:石井俊匡
作画監督:伊藤公規

リバイバル後、悟は2006年で殺害された母・佐知子と再会。そこでの暖かな会話は、まだ二人の間に距離ができる以前のものだった。悟は何気なく過ごしていた時間がいかに大切なものだったかを痛感する。

変えたい…!

リバイバルをしたということは、違和感を見つける必要があるということ。学校に登校した悟は、この後殺害されることになる雛月加代に注目。彼女に声を掛けようとするのだが……。

18年前の自分がやらなかった行動を起こし、雛月をひとりぼっちにしないようにすることで、犯人の手から彼女を救おうとする悟。雛月を誕生日会に誘うことで、惨劇は回避されるのか?

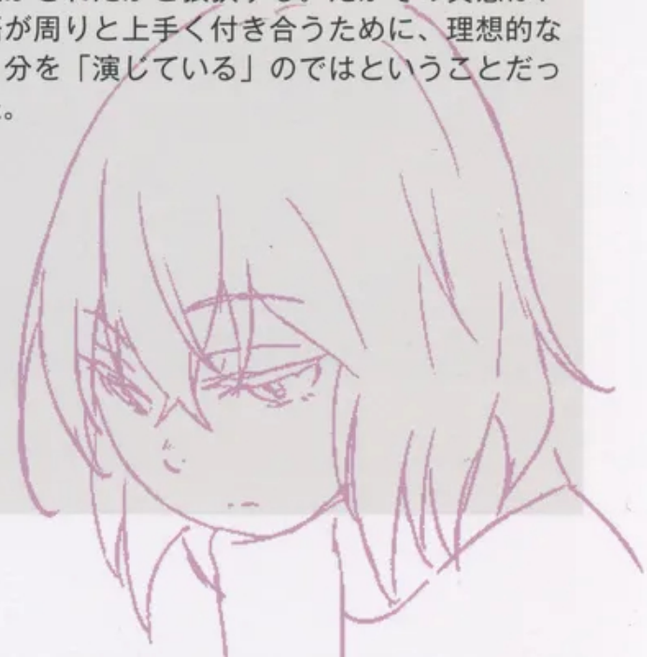
KEYWORD

【ヒーローのお面】

悟が家に戻ってきて手にとった仮面のようなもの。これは第1話に登場した悟の頭を撫でているヒーローのお面であるようだ。ここで母を想起していることや第1話における走馬灯のイメージから、このお面が縁日で佐知子に買ってもらったものであることが分かる。

【藤沼ってさ、私と同じでニセモノだから】

雛月が悟に対しての印象を語った言葉。悟は一瞬、自分の中身が29歳相当であることを見透かされたかと狼狽する。だがその真意は、悟が周りと上手く付き合うために、理想的な自分を「演じている」のではということだった。



私だけがいない街

昭和63年の小学生連続誘拐殺人事件で最初に被害にあったのが、悟のクラスメートだった雛月加代だった。18年前に戻った悟は、もしこれがリバイバルなら、この時代が母を救う分岐点であるはずと考えた。そして「違和感」として察知した雛月加代こそがリバイバルを終わらせる鍵であると推測。雛月を探ろうと考えるようになる。

打撲傷の痕

雛月に注意を向けていた悟は、彼女の足に打撲傷の痕があるのを確認。雛月が虐待を受けているのではと思える最初の気付きとなった。

「母親って…そんなに大切なもの?」

河川敷にて悟と会話した際、雛月が発した言葉。彼女は母親と二人暮らしであり、何か含むところがあると考えられる。

学級文集の内容

ケンヤから教えてもらった学級文集における雛月の作文。自分がいなくなることを想像し、遠くに行きたいというその内容は、紛れもなくSOSだった。

リバイバルの意味

リバイバルをしたということは、佐知子を救うための起点がこの時代にあるということ。この時代で「違和感」を解消すればリバイバルも終わるはずなのだ。

ケンヤの目線

クラスメートで、悟の友人であるケンヤ。その洞察力は鋭く、保健室に行くと言った悟の嘘をすぐに看破する。悟に対し、何か思うところがあるようだ。

対岸にいる人物

対岸から悟と雛月を見つめる青年。その目線は、雛月を狙っているようにも見える。手にはペーパークラフトが握られており、「あの人」を想起させるが……。

ひとりぼっちの雛月加代

家に帰りたくなかった雛月は、学校からの帰り道、いつも公園にひとりで佇んでいた。彼女が最後に目撃された場所もここであることから、もし彼女が孤独でなければ、殺されずに済んだ可能性も…？

KEYWORD

【アジト】

悟、ケンヤ、ヒロミ、カズ、オサムは「アジト」を作って遊んでいたようだ。雪が降ったあとは足跡が付くため、行かないという決まりだという。

【ゴミ袋の中身】

雛月の文集が読まれている際のイメージに、ゴミ袋を出す女性の姿が描かれている。ゴミ袋の中には「雛月加代」と書かれた何かが入っているようだが……。

■制作こぼれ話

第２話は作画監督などで入ってくださった伊藤（公規）さんの力が存分に発揮されています。吐き出す白い息まで作画で描いてきてくださって、後の話数のカットにも流用させてもらっています。こだわったところで言うと、Bパートに入ったところでの子供たちがおしっこしているシーン。あれは伊藤さんご自身の原画なのですが、ラッシュの時に、おしっこの色を変えさせてほしいと突然言い出されて。「そこにこだわるのか！」と驚きました（笑）。

藤田祥雄（制作デスク）&渋谷晃尚（設定制作）

第三話 痣

雛月加代が失踪した日が判明すれば、事件を阻止できるはず。そう考えた悟は、八代から聞き出した情報により、誕生日の前日3月1日こそがXデーだと確信する。些細なことから雛月との距離ができていた悟は、仲直りしようと彼女の家に赴いた。そこにはボロボロの姿で物置に横たわる雛月の姿があった……。悟に心を閉ざし、悲しい嘘をつく雛月。翌日、給食費の紛失事件で犯人扱いされた彼女を悟は庇い、疑いを向けた美里を一喝した。雛月との距離を縮めた悟は、彼女を時季外れの“クリスマスツリー”へと誘い「夏になったらまた見に来よう」と約束を交わすのだった。

STAFF

脚本:安永 豊

絵コンテ・演出・作画監督:鹿間貴裕

雛月家の裏手に打ち捨ててあった無残な状態の手袋と、ランドセル。その先の物置で、悟は信じられないものを見ることになる……。

見に来よう…

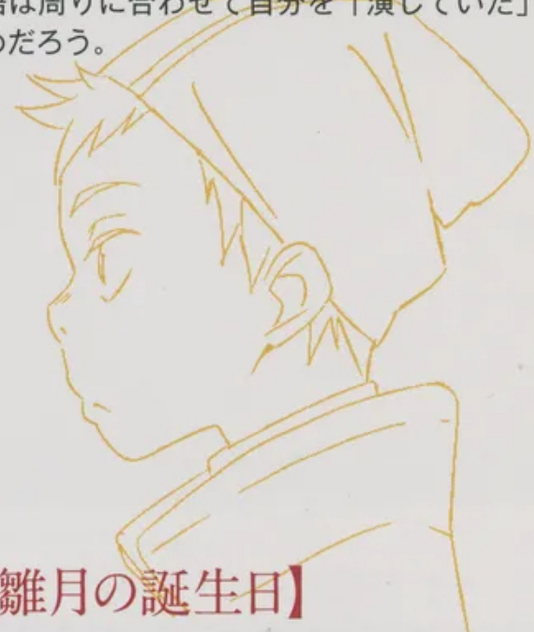
悟と浜田のスケート勝負。僅差の勝負となっていたが悟は浜田の努力を思い、ゴール前で勝ちを譲る。だが、それに気付いた雛月は「精一杯やってみる」と言った悟が嘘をついたことに人知れず落胆していた。

クリスマスツリーに憧れていた雛月のため、悟は彼女を連れて山へと誘う。その目の前にあったのは雪を被って輝く大木だった。季節外れのクリスマスツリーを見て、雛月は思わず笑顔をこぼす。

KEYWORD

【浜田との勝負】

悟はスケートで力を出し切らず、浜田に勝ちを譲る。29才の大人としての浜田に対する遠慮ともいえるが、その際に18年前にも同じ行動をとっていたことを思い出す。子供時代の悟は周りに合わせて自分を「演じていた」ためだろう。



【雛月の誕生日】

第３話では、雛月の誕生日が悟と同じ３月２日であることが判明する。第２話、公園で誕生日会に誘われた際に、雛月が驚いたような素振りを見せていたのはこのためだ。

【雛月の手袋】

第２話、公園で悟は自分と同じように雛月が手袋をしていなかったことに気がついた。第３話では物置前に彼女の手袋が焼け焦げた状態で落ちており、母親による虐待の一環として持ち物を破壊されたのだろう。

雛月の虐待

雛月と仲直りするために、彼女の家へ
やってきた悟。不在かと思われたが、
のため家の裏手に回った彼は、雛月の
袋や散乱するランドセルの中身に気が
いた。そのあとを辿った先にある物置
で、悟は下着姿で傷だらけの雛月を発見
し愕然とする……。

ごまかそうとする雛月

打撲傷について問われた雛月の母、明美。だが、慌てる様子もなく「答えてあげな」と雛月自身を促す。そこで力なく発せられた言葉は「転んだ」という明らかな嘘だった。母親の支配に逆らえない雛月の恐怖心が見て取れる。

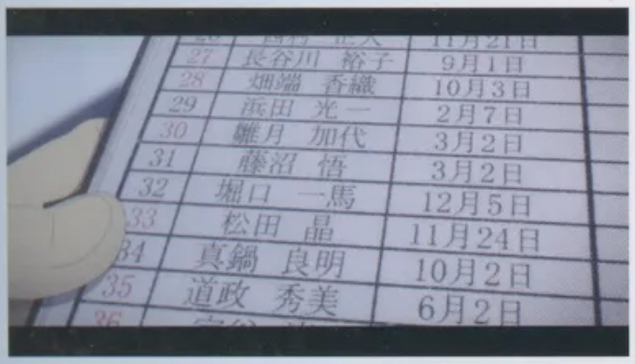
世間体を気にする母親

明美によって、洗面台の水の中に、顔を沈めさせられる雛月。月曜日に学校へ行くまでの間に、無理矢理顔の腫れを引かせようとしているらしい。母親は周囲への世間体を気にするタイプであるようだ。

八代と児童相談所

八代は雛月への虐待に気がついていた。そのため、担任になった直後の5月から児童相談所に連絡。調査員は聞き取りのため三度にわたって雛月の家にまで来ていたが、いずれも母親は留守にしており、虐待を阻止できていない状況だという。

Xデーは3月1日



悟が元いた時代において、雛月は3月に殺されている。かつ、11歳の誕生日を迎える前だったはずという記憶に加え、八代の協力で彼女の誕生日が3月2日であったことが発覚。Xデーは3月1日だということが判明した。

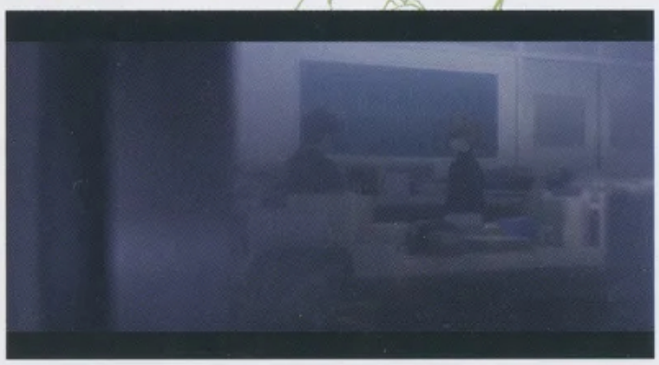
給食費紛失事件

日直だった悟の預かっていた給食費が紛失する。すぐさま美里の提案により、クラス中で持ち物の捜索が行われ、雛月の元から見つかる。雛月が犯人扱いされるのを悟が一喝。美里が仕掛けた悪巧みなのではと彼女を睨みつけるが……。

白鳥潤は犯人なのか?

ユウキさんの自室で、彼が雛月を知っていることを確認する悟。あっさりと彼女と面識があると答える彼にやましいところはないようだ。

八代とケンヤ



第3話のラストカット、職員室で何かを話している八代とケンヤの姿が。これから起こる事件に関係があるのだろうか。

KEYWORD

【月曜日に遅刻する理由】

第２話において、担任である八代は「月曜日…加代は今日も遅刻か」と漏らしていたが、雛月は第３話においてもやはり月曜日に遅刻している。その理由は土曜日に母親に殴られているためという凄惨なものだった。

■制作こぼれ話

悟のクラスメートは、全部ちゃんとキャラクター設定を起こしているんです。しかも設定上は、一応みんな名前を付けているんですよ。

キタキツネが回るカットは素晴らしい原画ですね。あれは動物好きなアニメーターさんで、四足描かせたらこの人！　という亀澤蘭さんにお願いしました。先の話ですが、11話のとある動物についての印象的なカットもこの方なんですよ。

３話はクリスマスツリーのカットに苦労しましたね。CGで木のモデリングを作って、美術の段階で可能な限りレイヤーを分けて、撮影監督の青嶋（俊明）さんとコンテ・演出の鹿間（貴裕）さんとで何度もやり取りをし調整していったんです。その甲斐あって、仕上がりはとても良い物になったと思います。

藤田祥雄（制作デスク）&渋谷晃尚（設定制作）

第四話 達成

Xデーまであと１週間。雛月を週末の虐待から救うべく、科学センターに誘う悟。佐知子の助けもあって無事に雛月を連れ出すことに成功する。だが科学センターで過ごす中で、悟はデジャ・ヴを感じる。雛月と18年前にも全く同じ会話をした記憶がある…、同じ時のレールに乗っているのではと不安に駆られる悟。そして迎えたXデーの当日。以前と状況は変化し未来は変わったはず。その願い通り、Xデーは何事もなく終わった。翌日には仲間達との誕生日会を迎え、雛月から「プレゼントを明日渡す」という約束をされる悟。ついに歴史を変えたという実感に浸る。だが、その約束が果たされることはなく――。

STAFF
脚本:岸本 卓
絵コンテ・演出:綿田慎也
作画監督:横田匡史

誕生日会のサンドイッチパーティーは友人たちがサプライズを準備していた。雛月と共に楽しい時を過ごし、彼女を家まで送って、ようやく歴史を変えた達成感に浸る。だが、悪夢はまだ終わっていなかった……。

日渡すね・・・

雛月と共に科学センターに赴いた悟。そこで彼はリバイバル前にも雛月と同じ会話をしていた事に気がつく。自分は何も変えられていないのでは？　という疑念が、悟を苛む。

科学センターへ雛月とデートに行こうとする悟。そのために彼女の母親を説得しようと試みるが、旗色が悪い。さらにDVに関する言い回しに触れてしまい、一触即発の空気に。そんな中、割って入ってきたのは佐知子だった。

KEYWORD

【先生はあたしのこと、泥棒だって思ってるべさ】

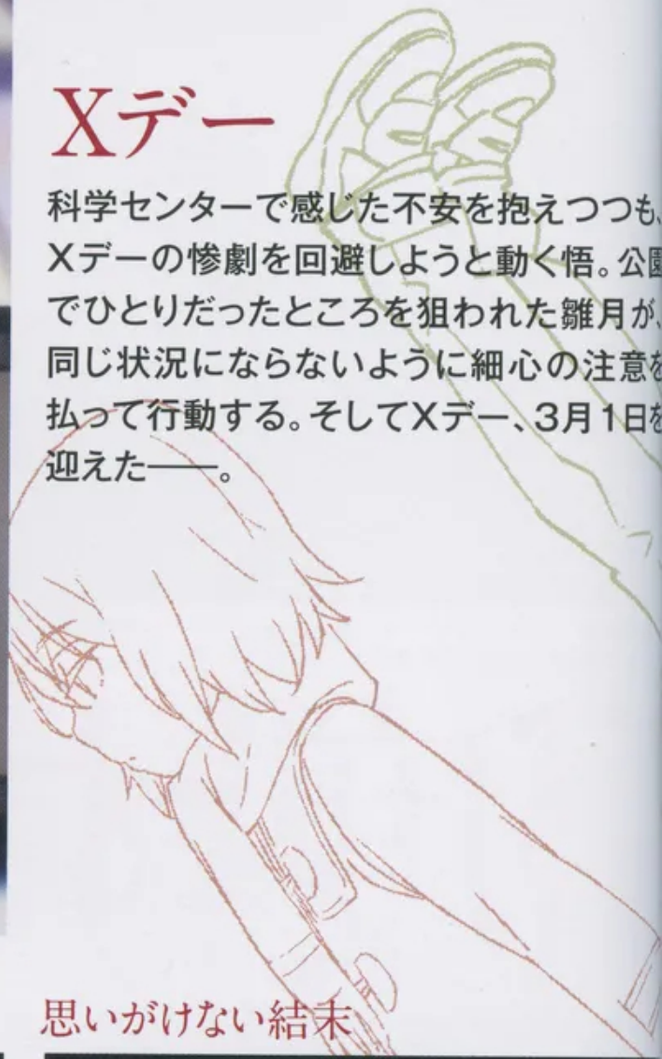
給食費紛失事件を経て、美里の心持ちは以前と変化しているようだ。友人たちも先生も自分を犯人扱いしていると考え、彼女はひとり毒づいて教室を去っていく……。

【さすが元テレビ局報道部……】

雛月の服装から、彼女の母親が外面を気にする性格であることを見抜く佐知子。その洞察力はテレビ石狩の元報道部だった過去の経験から培われたものであるようだ。

Xデー

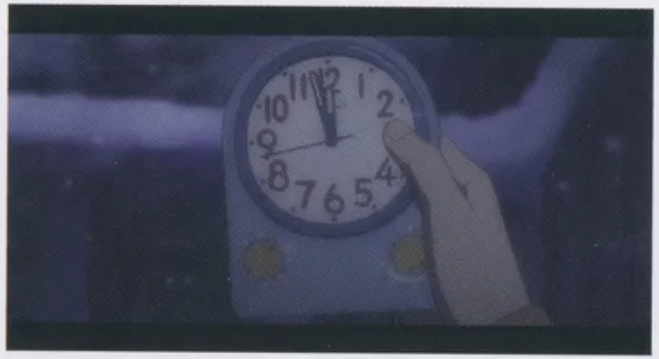
科学センターで感じた不安を抱えつつも、Xデーの惨劇を回避しようと動く悟。公園でひとりだったところを狙われた雛月が、同じ状況にならないように細心の注意を払って行動する。そしてXデー、3月1日を迎えた——。



Xデー当日

3月1日、悟と雛月は二人で登校。下校時にも一緒に帰宅する。その途中児童館に寄って時間を潰すことで、彼女がひとりになる時間はほぼ無くなった。犯人の付け入る隙を与えないための悟の防衛策だ。

Xデーの終わり



深夜、あまりに呆気無くXデーが終わろうとしていることに、落ち着かない気持ちになる悟。深夜0前に雛月の家へと様子を窺いに行く。辺りは静かなもので、何かが起こった気配もない。そして、日付は変わりXデーは終わりを告げた……。

思いがけない結末

Xデー翌日の3月2日早朝、悟は雛月の家に迎えに行き、彼女の無事を確かめる。その後行われた誕生日会を終えて雛月を家に送ったところで、悟の緊張の糸は途切れた。だが翌朝、悟は雛月が登校してこないという現実に衝撃を受ける。それが意味するところを、他ならぬ悟だけが直感していた……。

リバイバル前のXデー

今回のアバンで語られる、リバイバル前の3月1日。その日悟は18時少し前に公園で雛月を見かける。そのまま手袋を取りにアジトへと向かい、家に帰る途中、土手にいるユウキさんを目撃。再度公園を通り過ぎた時には、すでに雛月の姿はなかったという。

悟と雛月の誕生日会

悟と雛月の誕生日会の準備をするために、ケンヤは八代の協力のもと秘密裏に動いていた。ヒロミやカズ、オサムも巻き込んで、藤沼家の飾り付けを行なったりとサプライズを仕掛けたようだ。

Xデー夜の行動

悟が雛月を救おうと動いた3月1日の夜に、悟と雛月に関わる人々の点描がある。ユウキさんは父親と会い、雛月の母は自宅へと戻る途中、その交際相手は店で酒を飲んでいる。ケンヤはサッカーの練習、八代は生徒の答案を採点する…。この中に誘拐犯はいるのだろうか——。

「俺は歴史を変えたんだ!」

雛月を無事自宅に送り届けた後に悟自身が実感しているように、3月1日に雛月が失踪しなかったのは、悟が確かに歴史を変えたためだ。リバイバルが終わった際、この歴史改変はどのように影響するのだろうか。

KEYWORD

【バッグの中を見る雛月】

児童館で雛月がちらりと横目で見た彼女のバッグ。その中には毛糸玉が入っていた。彼女は悟へのプレゼントを作りたいと考え、児童館から早く帰りたかったのだ。

■制作こぼれ話

悟が朝起きる時に目覚まし時計とともに本棚が映りますが、タイムトラベル物の小説がちらほらと見えるかと。これはちょっとお遊び的に入れてみました。一応、出版年数を調べて、当時存在しないものは入れないよう配慮しています。

第４話で印象的なのは、３月１日の夜の点描で、ユウキさんを父親が迎えにくるところなんです。父親が乗ってくるトラックのライトはこだわっていて、今と違ってLEDのようなはっきりした光ではなく、白熱球が入っているイメージにしているんですね。あのぼんやりした光がノスタルジー感があって好きですね。

藤田祥雄（制作デスク）&渋谷晃尚（設定制作）

1977年　1982年　1988年

3月2日(水)　5月18日(火)　2月15日(月)　2月16日(火)　2月17日(水)　2月18日(木)　2月20日(土)　2月22日(月)　2月23日(火)　2月2

リバイバル・クロノロジー

ここでは、『僕だけがいない街』で起こった出来事を時系列順にまとめた。
リバイバル前とリバイバル後では、細かな点で変化がある。

リバイバル前の歴史

藤沼悟、
雛月加代誕生

悟、スケートの授業で浜田に負ける

悟、佐知子からデート
雛月をデートに誘い、
雛月母の説得に雛月

リバイバル後の歴史

悟、リバイバル後
初めて雛月と会話

悟、雛月を
誕生日会に招待

悟と八代、
雛月の虐待について話す

リバイバル開始

悟、文集を読む

悟、雛月の誕生日を知る
悟、河川敷でユウキさんと会い、
白鳥家を訪問
悟、雛月の虐待現場を目撃

悟と雛月の日直日
給食費が紛失し、
雛月が持っていたこと
クリスマスツリーを見に

2月27日(土) 3月1日(火) 3月2日(水) 3月3日(木) 3月6日(日) 3月7日(月) 3月9日(水) 3月12日(土) 3月13日(日) 3月中旬～下旬 6月 9月

悟、公園で雛月の姿を目撃する
雛月加代失踪

中西彩失踪

杉田広美失踪

白鳥潤逮捕

雛月加代の遺体発見

6:00 悟、雛月家に行く
悟と雛月の誕生日パーティー

21:00 頃 雛月、パーティーから帰宅後に
母親とその交際相手から暴行を受け、
自宅物置に閉じ込められる

22～23:00 雛月、物置から連れ去られる

悟、学校に登校
八代、生徒に嘘の報告をする

中西彩失踪
児童のみでの外出が禁止される

事件が公開捜査に
切り替えられる

科学センターで
デート

澤田、藤沼家を訪問
悟それを目撃

悟、雛月家から雛月と一緒に登校
児童館に行った後、一緒に下校
悟、深夜０時前に雛月家を訪問

0:30 失踪に気づいた雛月母、藤沼家に電話をかける
～6:10 犯人、日の出前に雛月の遺体を物置に戻す
7:00 過ぎ 雛月母、遺体を発見する
悟、雛月が登校していないことを知る
9:20 悟、雛月家に向かう
雛月母とその交際相手、雛月の死体の前で思案
10:00 悟、学校に戻る

悟がゴミを捨てる雛月の母親を目撃する
リバイバルが終わる

1989年　1992年　1997年　2000年　2006年

5月6日(土)　5月8日(月)　5月9日(火)　5月10日(水)　5月11

リバイバル前の歴史

白鳥潤裁判開始

札幌高等裁判所、
白鳥潤の控訴を棄却
上告

悟、交通事故に遭い
入院

埼玉市の
小学校1年女児が
保護される
悟退院
悟、佐知子と
アパートで再会

佐知子、図書
18年前の犯人
佐知子殺害され
悟にリバイバル

白鳥潤札幌地方裁判所にて
死刑判決
控訴

最高裁判所上告を棄却
白鳥潤の死刑が確定

埼玉市で
小学校1年女児が
行方不明になる
悟目覚める

佐知子、誘拐犯を目撃

リバイバル後の歴史

【二つに分かれた昭和63年】

2本の時のレールにおける最大の違い、それは雛月加代の失踪時期だ。リバイバル後の行動によって雛月と悟の間に新たな交友関係が生まれ、ケンヤ達とも友だちになった。これをきっかけに公園で孤独にすごす時間もなくなり、母親の暴力を回避することにも繋がった。
そしてこれらの変化の結果として、雛月は誘拐事件で失踪した時に叶わなかった11歳の誕生日を迎えることができた。この点では確実に歴史は変わっているが、誘拐事件自体は新たな形をとることに…。

リバイバルから戻
警察から逃れ、
橋の下で眠る

5月12日(金) 5月13日(土) 5月14日(日)

【悟のデジャ・ヴ】

リバイバル後の昭和63年2月27日。雛月を科学センターへのデートに連れて行った悟は、奇妙なデジャ・ヴを感じる。18年前にも、同じ場所で同じ会話をしていることを思い出した彼は、リバイバル前と同じ時のレールに乗っているのではという疑念を持つことになる。結果、その不安は的中。雛月は再び失踪してしまう…。

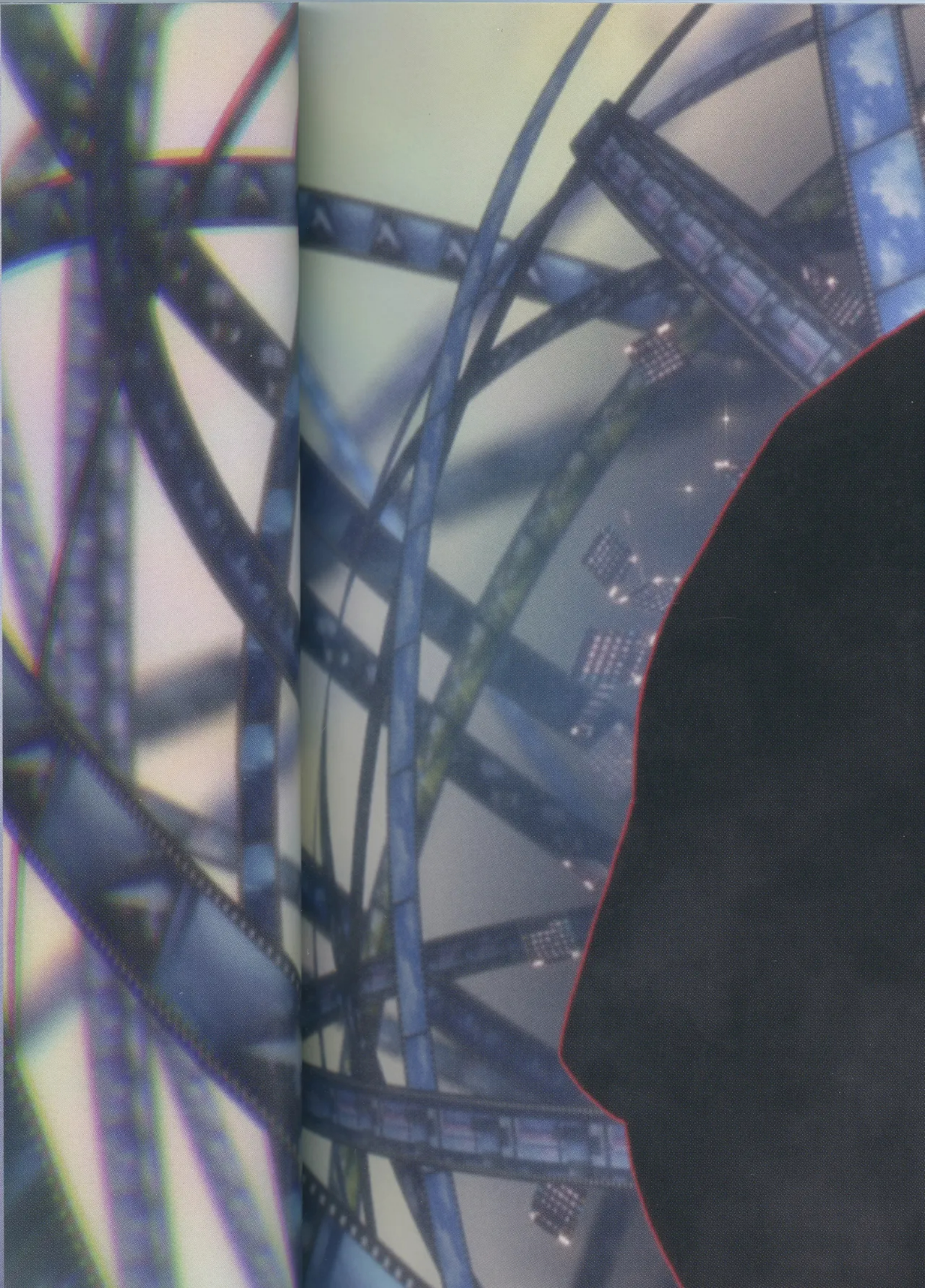
【時のレールは改変できる】

悟にとっても初めての体験となる、18年の時を跨いだリバイバル。
もう一度2006年に戻ったのは、雛月加代が再び殺害され、「違和感」を解消できなかったためのようだ。現代に戻った悟は「ニッポン 昭和の重大事件史」の記述が以前とは変わっていることに気がついた。雛月の死亡時年齢が11歳になっており、リバイバル中に起こした変化が確かに反映されている。
悟の行動の結果、事件の歴史は改変された。だとすれば再度昭和63年へのリバイバルが起これば、歴史を変えられる…。

17:00 西園市議、
悟のバイト先を訪れ、
愛梨と出会う
19:25 愛梨の携帯に佐知子の携帯から
メールが届く

悟、高橋店長と再会
悟、愛梨と再会
佐々岡家に避難する

悟、小岩で澤田と会う
愛梨病院で目を覚ます
澤田、愛梨の入院している病院を訪ね、
愛梨の逃亡が発覚する
悟と愛梨が再会する
16:50 悟、逮捕される



第五話 逃走

雛月に続き、中西彩が失踪した。18年前と同じ時の流れに乗っている…それを知る悟だけは雛月の死を直感する。そして彼は雛月の母親が捨てたゴミ袋の中に編みかけの手袋を見つけ、咆哮する——。気が付くと、そこは2006年。過去を変えられなかったために戻ってきた悟は、警察から逃げ、アルバイト先の店長である高橋の自宅に避難する。だが救ってくれたはずの高橋は、警察に通報していた。再び窮地に立たされた悟を救ったのは愛梨だった。父親に纏わる苦い経験と、だからこそ人を信じたいという想いが悟の心に染みる。だが、母・佐知子を殺害した犯人の手はそんな二人の元にまで及び——。

STA
脚本:岸本
絵コンテ:平川哲
演出:星野
総作画監督: 佐々木啓
作画監督:新井

雛月を救えぬまま、2006年に戻ってきた悟。警察に追われる身となった彼は、高橋の厚意に甘え、彼の自宅へと逃げこむ。一旦は人心地つく悟だが、高橋は警察に通報していた。慌てて逃げ出す悟。その前に現れたのは、愛梨だった。

ど、信じたいの…

なんの疑いも持たずに悟を助け、自宅へと匿う愛梨。翌日、彼女はいつもどおりピザ屋のアルバイトへと出勤。だがその帰路の途中、高橋が悟を警察に通報しようとしていることに気がついた彼女は、悟の安全のために、自宅から出ることに。

橋の下に逃げてきたふたり。そこで愛梨は、自身の過去について語り出す。父親とともに行った買い物で起きた盗難事件。疑われる父を、愛梨は最後まで庇った。だが父はそのまま家を出て行ってしまったという……。

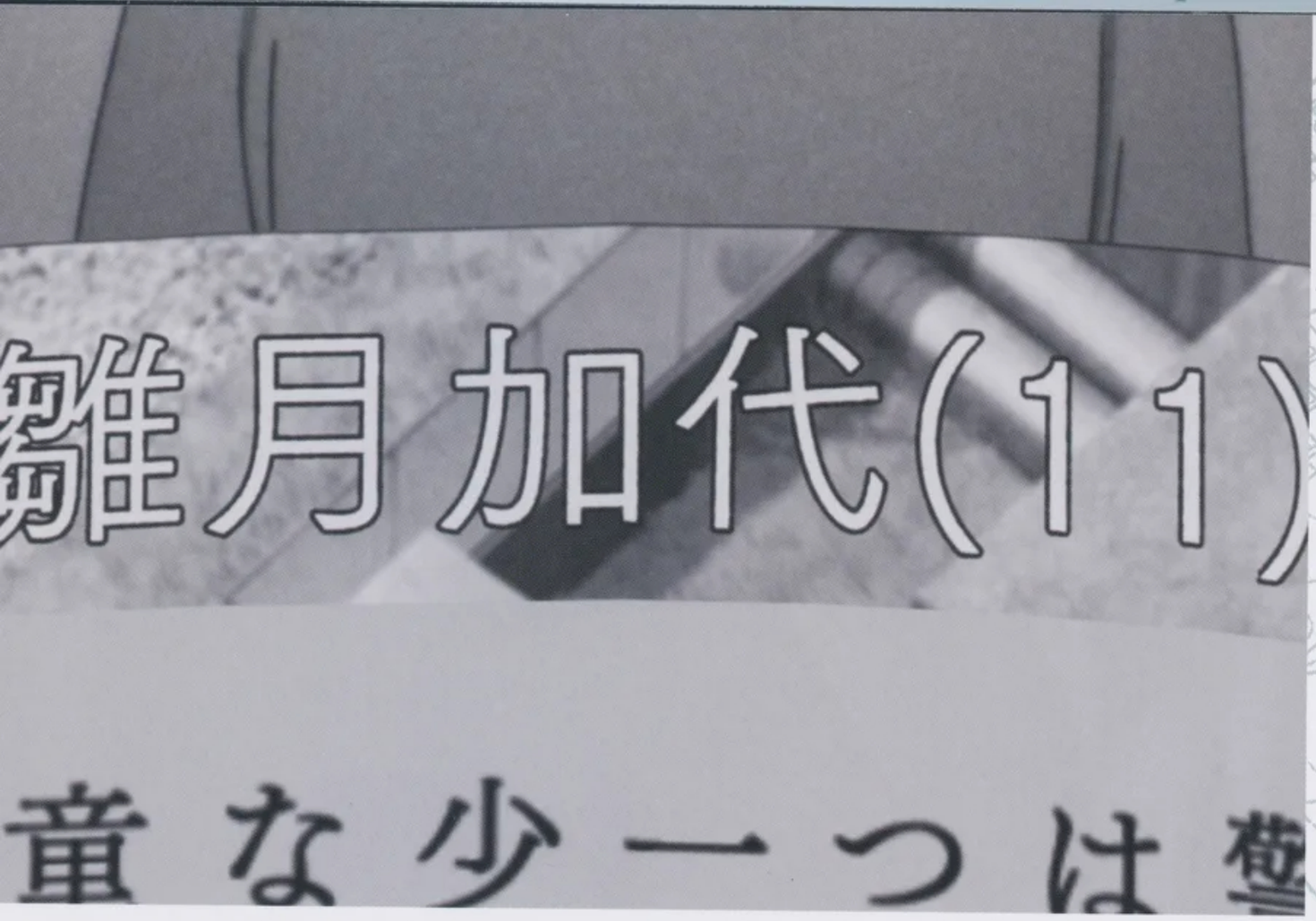
KEYWORD

【雛月母の前にある人影】

雛月の母親と愛人の目の前に転がっていたもの。それは人の形をしている何かだ。足には痣らしきものも見えているが……。

【隣の市の事件】

昭和63年において、佐知子が話していたのはテレビ石狩で同僚だった澤田だ。彼は隣の市でも似たような事件が発生していたことに言及する。それは雛月の事件とも関係があるのだろうか。



過去は改変でき

2006年に戻ってきた悟は、事件のあ
しが掲載された本「ニッポン昭和の重大
件史」の内容がリバイバルの前後で変わ
ていることに気がつく。つまり、リバイバ
中の悟の行動は、2006年に反映され
ということだ。もう一度リバイバルを行い
違和感を今度こそ解消すれば、雛月が生
続けた2006年もありうるかもしれな
……。

雛月救出失敗

リバイバル後、様々な手を尽くした悟。Xデーである3月1日を回避し、その翌日も雛月を守ったが、3月3日にやはり雛月は失踪してしまった。学校では雛月が祖母の家に引き取られたということにされ、報道も規制される。

事件の拡大とリバイバルの終わり

雛月失踪から6日後には隣の小学校の中西彩も失踪。事件は急速に拡大する。何もできない悟は、雛月の母が出したゴミ袋の中に編みかけの手袋を見つけた後、期せずして2006年に戻る。それは、雛月も佐知子も救えなかった事を意味していた。

雑誌記事の変化

2006年に戻った悟が読んだ本「ニッポン昭和の重大事件史」記事。そこには、雛月の死亡日が3月3日であることが記載されいた。リバイバル以前には3月1日と書かれていたことから、悟リバイバル中の行動で歴史が改変されたことに気がつく。

高橋店長

ピザ屋の店長で、悟と愛梨の上司にあたる高橋。彼は悟を自宅に招き入れたうえで、警察に通報している。悟の不利になる行動をとる高橋だが、その行動原理は愛梨との関係に対する嫉妬混じりの感情にあるようだ。

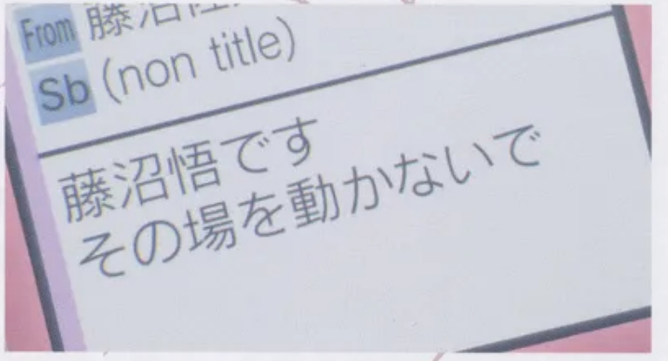
3年前の誘拐事件

図書館で犯人に対する手がかりを探す悟は、市内で3年前に児童誘拐事件が発生していたという記事を見つける。事件から3週間後に容疑者は逮捕されたが、一貫して無罪を主張したという。悟はこの事件に、奇妙な引っかかりを覚える。

西園という男

ピザ屋で高橋と話をしていた西園という男。会話の内容から、彼は市議会議員であるらしい。愛梨のことを気にしていたようだが……。

犯人からのメール



着替えを取りに家に戻った愛梨。そんな彼女の携帯に「藤沼悟です　その場を動かないで」という不審なメールが送られる。差出人は佐知子であることから、メッセージを送ったのは、佐知子の携帯を奪った犯人であることに気がつく愛梨。だが、彼女の家はすでに火に包まれており……。

KEYWORD

【二人乗りはおあいこだから】

悟を助けた愛梨が漏らした言葉。第１話で、悟が愛梨を送っていった時に、二人乗りをしていたことを指している。

【この間店に忘れてたよ】

愛梨が手にしていた「ニッポン昭和の重大事件史」は、元は悟が持っていたもの。第１話において、悟がピザ屋に忘れていったものを、愛梨が見つけている。

【高橋の行動原理】

高橋は第１話で、悟が愛梨と仲良さそうに話しているところをじっと見つめている。この頃からふたりに対し、思うところがあったのだろう。

■制作こぼれ話

悟が何もできないまま、事件が進行していくAパートの河川敷の背景で、日が昇ってくるカットがあります。背景の奥から陽の光が見えてきて朝になるというのがよくある手法なのですが、ここでは、背景二枚をじわっとOL（オーバーラップ）させて表現してみました。悟の悲しみや、北海道の冷たい空気感がうまく出たカットになっていると思います。

藤田祥雄（制作デスク）&渋谷晃尚（設定制作）

第六話 死神

炎に包まれる愛梨を救い出した悟。その際渡された携帯から、火事は真犯人によるものという確信を得た彼は、元テレビ石狩の記者・澤田という男とコンタクトを取る。澤田から佐知子が真犯人を知っていたこと、そして真犯人は別の容疑者を用意する狡猾な人間だという推察を聞く悟。澤田の調査資料を読みすすめるうちに、ヒロミ殺害以前の容疑者リストに犯人の名前があると思い至る。愛梨と橋の下で落ち合った悟は、疑惑の人物として西園という男の存在を知る。しかしその名前は、リストにはなかった……。その時、突如悟は警察に取り囲まれ、ついに手錠を掛けられる。連行される彼は、野次馬の人垣の中に「帽子の男」を見つけ…そして時間が止まった…。

STAF
脚本:岸本
絵コンテ／演出:森 大
作画監督:山名秀

悟は、佐知子が死ぬ前に残したメモの携帯番号に電話を掛ける。応対したのは元テレビ石狩の記者であり、小学生時代の悟とも面識のある澤田という男だった。悟を自身の事務所に招き入れ、佐知子殺害と18年前の連続誘拐殺人事件との関連性を語る。

言じてよかった

愛梨は悟が濡れ衣を着せられ、誰にも信じてもらえない状況であることを自分の母親に吐露する。母親はかつて夫を信じ切れなかったことへの後悔を語り、病室から抜けだそうとする彼女の身代わりとなる。

橋の下で再び出会う悟と愛梨。だが、愛梨は尾行されていた。逮捕され、愛梨との別れを予感した悟は、彼女に声を掛ける。そのまま連行される悟を、あの男が冷たい瞳で見つめていた……。

KEYWORD

【手柄は俺のもんだ】

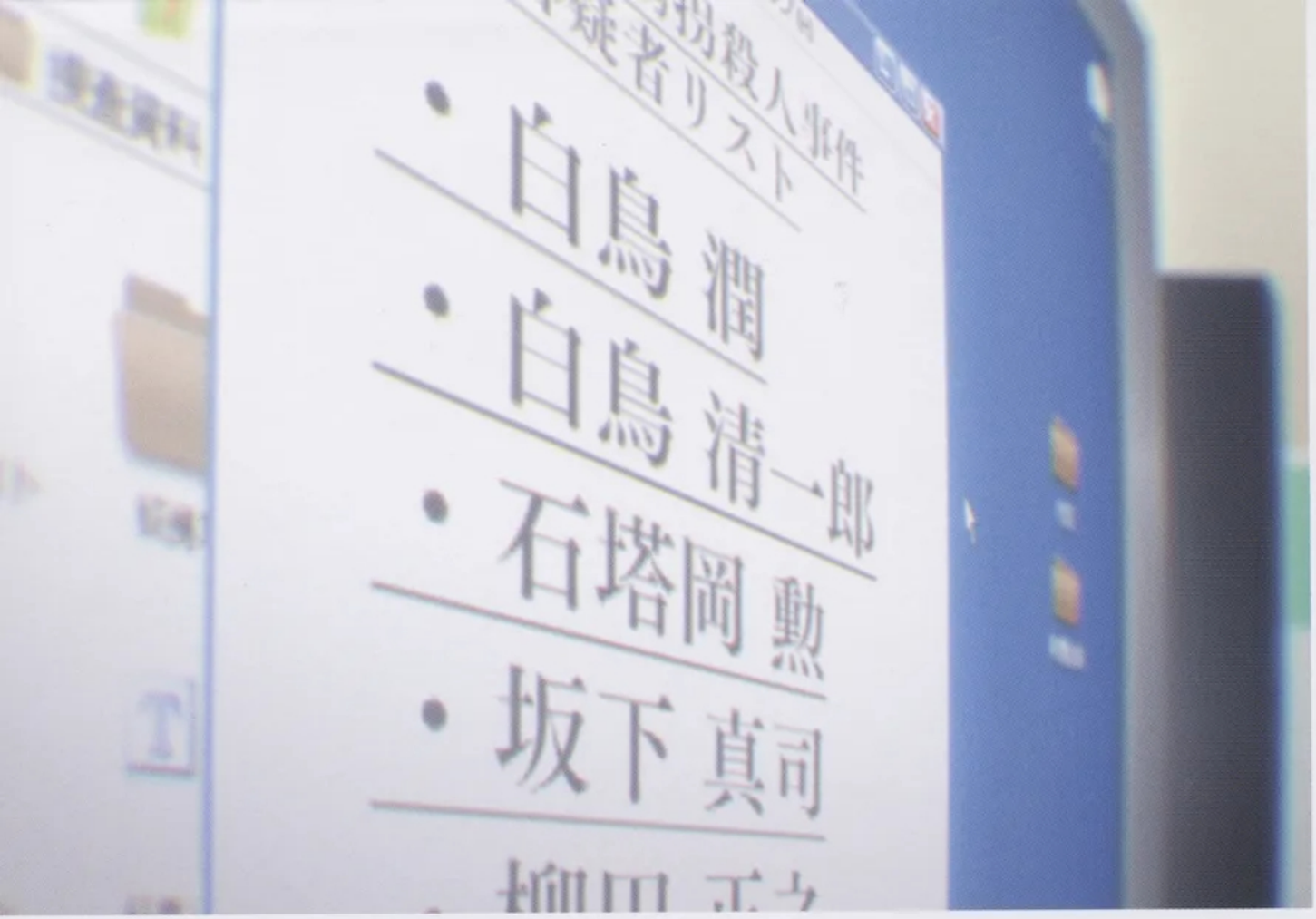
愛梨を救い出す際に高橋店長が悟に言った言葉。状況から額面通りの意味だけではなく、ここにいたのは自分だけで、悟を見なかったことにするという意味も込められていると推測される。

【自分のせいだなんて思うのは思い上がりってもんだべさ】

第５話にて、佐知子が悟に同様の言葉を掛けていた。

容疑者リスト

判決が確定した北海道小学生連続誘拐
人事件をいまだ追っていた、フリーの
ポライター澤田。彼が悟に見せた容疑
リストと調査資料は、事件の真相に迫
ための重要な情報となった。悟はその
猾かつ残酷な手口を知り、真犯人究明
決意を新たにする。



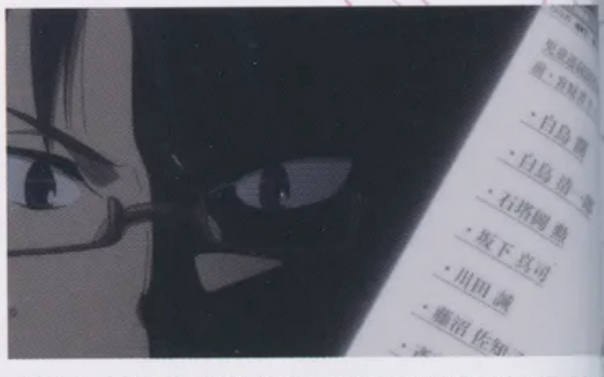
白鳥潤が犯人とされた理由

白鳥潤は自分の父親が犯人である可能性に思い至り、父に不利な面で黙秘し続けていたようだ。さらに彼は雛月と一緒にいるところを目撃されていた。決定的な証拠となったのは、ヒロミ殺害時に撮影された写真。これが白鳥食品倉庫から押収され、蔵書からも彼は小児性愛の傾向にあると結論付けられてしまう。

ヒロミはなぜ殺害されたのか

ヒロミは女児と間違われて殺害されたというのが、警察の見解だった。それにより、最終的に容疑者リストに残った人数はヒロミと面識のない五人となっている。だが、悟は容疑者リストから外れるために、あえてヒロミを殺したのだと推測。ひとつ前のリストにこそ、真犯人がいると考える。

最後のピース



愛梨から、ピザ屋に来訪し高橋と会話していた西園という人物
しいという情報を得る悟。だが、ひとつ前の容疑者リストにも
名前が存在しなかった。西園は市議であり、偽名は使えないは
ハマりそうでハマらない最後のピースに、悟は煩悶する。

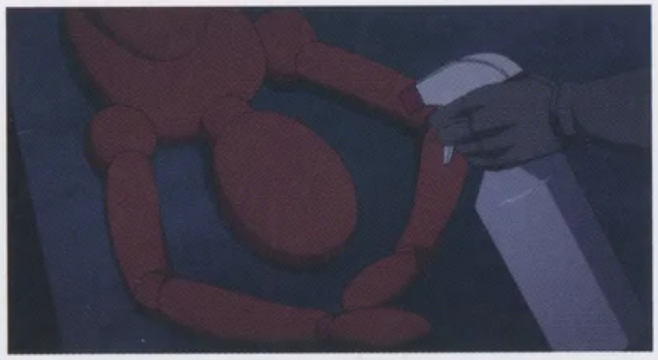
犯人に仕立て上げられる悟

炎に包まれる中、悟は愛梨から携帯を渡される。受け取った彼は、メールを見て戦慄した。それは悟が愛梨を狙って放火したとも取れる内容だった。悟は母親殺しだけでなく、放火犯としても追われることとなる。

犯人の手口

雛月たちの誘拐以前に、隣の市でも殺人事件が起きていた。犯人はスピード逮捕されたが、犯行を全面否認。澤田は二つの事件が酷似していると指摘。佐知子殺害も含め、これらの事件は別の容疑者を用意する同じ犯人に殺されたのだと断定する。

雛月殺害の詳細



澤田の話から明らかにされる、雛月加代殺害の手口。雛月は3月2日の夜に一度物置から失踪していたという。その手口は暴行を加えて気絶させ、写真撮影を行った後に、業務用冷凍庫で雪吹きを使って雛月を凍死させるというもの。その後、日の出前に死体は物置に戻されていた。

愛梨はなぜ狙われたのか

悟に放火の容疑を被せるためだけに愛梨が狙われたわけではない。そう推測する悟。佐知子殺害の際、犯人は悟のバイト先からの帰宅時間を知る必要があった。そのため、ピザ屋へと来訪しシフト表を見ているはず…。その時に愛梨に顔を見られた犯人は、彼女の殺害も企てているのではと悟は危惧する。

KEYWORD

【犯行手口の共通点】

第5話で図書館を訪れた悟は、3年前に市内で起きた事件についての記述を見つけた。そこに書いてあったのは、別の容疑者を仕立てあげるという真犯人のやり口通りの手段。悟はそこに引っかかりを感じていたのだ。

【共犯と疑われた愛梨】

炎の中から救出された愛梨は、佐知子殺害の共犯として警察から疑われることになる。愛梨は第1話において、佐知子とともにカレーを作り3人で食事をしていることから、警察は佐知子殺害の捜査の中で、彼女が部屋に来ていた形跡を発見したのかもしれない。

■制作こぼれ話

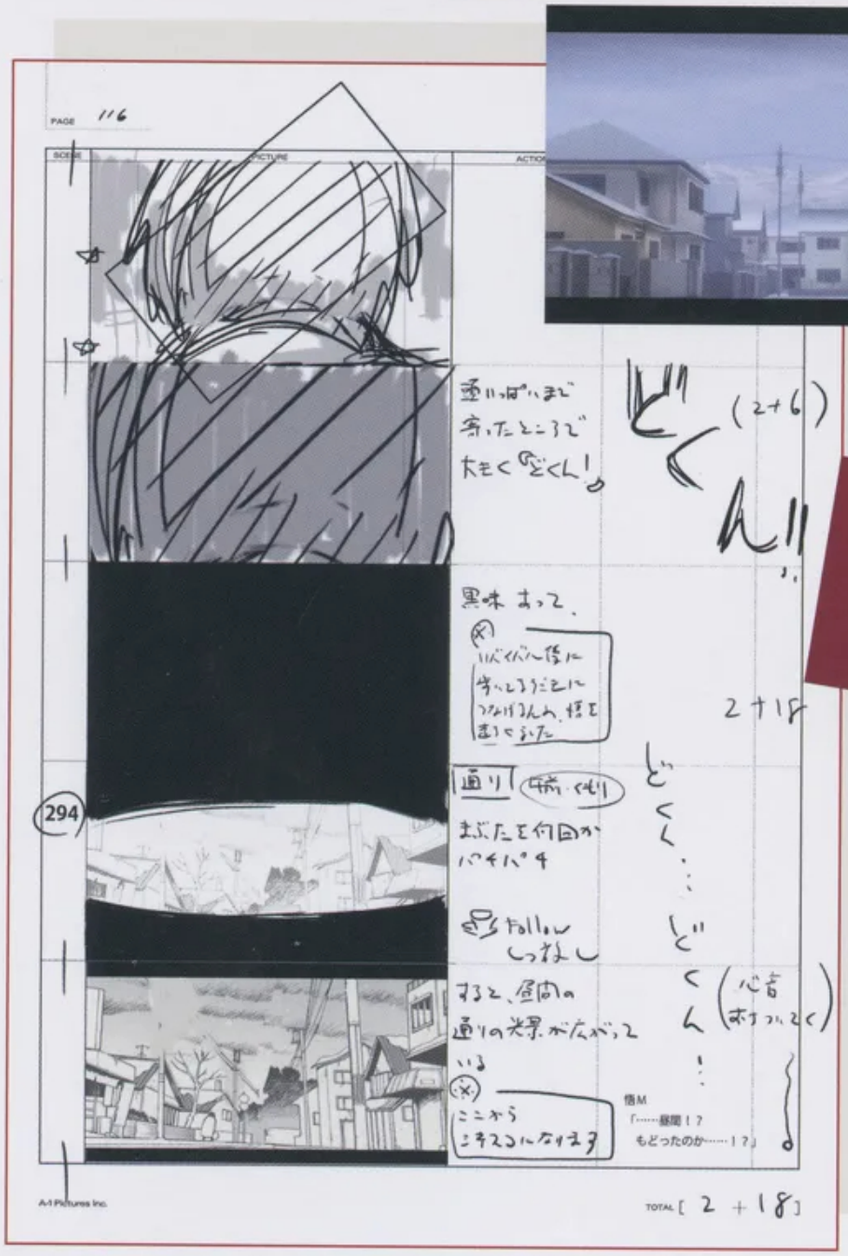
悟や愛梨は携帯電話を使っていますが、スマホではないんですよね。第1話では切符を使って電車に乗っていたりと2006年らしさには気を使っています。もちろん昭和63年との違いにも気をつけていて、例えば登場する自動車も昭和63年と2006年では変えているんですよ。

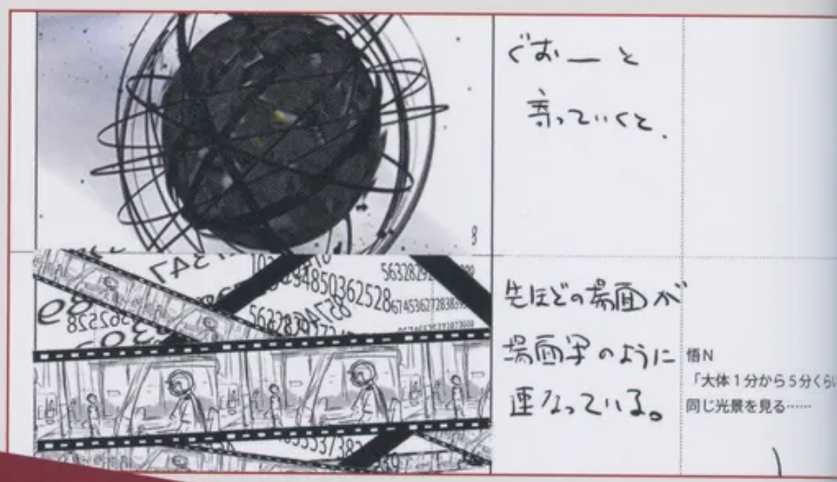
昭和63年は曇っていて、2006年は晴れているというのが、この作品の基本です。でも、2006年において、第6話のラストは雨が降っているんですね。だからこそ印象的なカットになっていると思います。

藤田祥雄(制作デスク)&渋谷晃尚(設定制作)

『僕だけがいない街』
絵コンテのトリック

アニメーションを制作するにあたっての映像設計図
呼ばれる「絵コンテ」。脚本の次の工程となるこの作
よって、映像を構築していく道筋がほぼ決定する。こ
計図を辿ることで『僕だけがいない街』がどのような
をもって演出されていったのかを確かめることができ



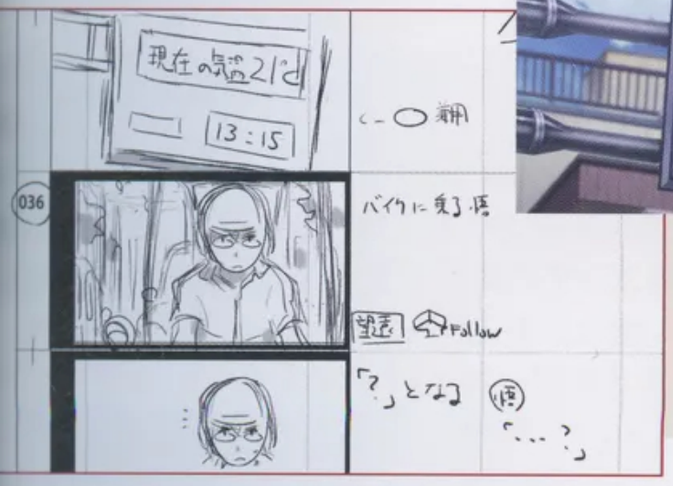


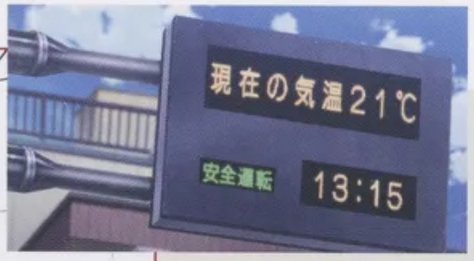
第一話 走馬灯

絵コンテ担当:伊藤智彦

【シネスコ(シネマスコープ)フレーム】

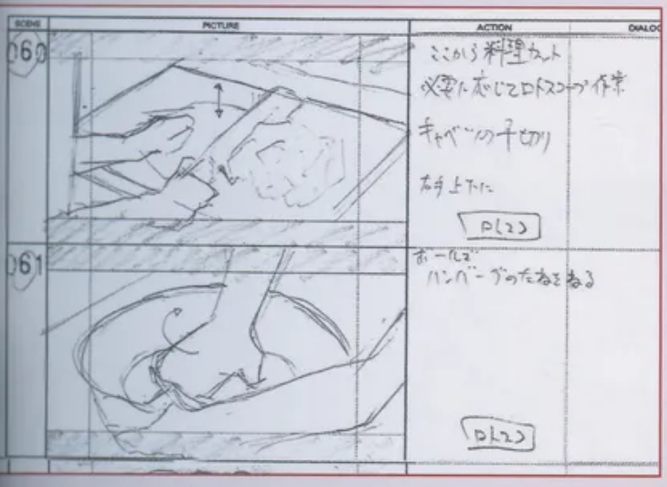
リバイバル後の映像は、ビスタ(1.66:1)からシネスコ(2.35:1)に、フレーム比率が変わっている。これは過去に戻ったことと、どちらの時代で何が起こったのかを明確にするための演出だ。映画を意識したこの処理は、回想シーンで使われる、様々なフィルムが散りばめられた悟のイメージ空間にも通ずるものがある。また、このシーンではマンガのコマを貼り付けることで、原作を再現する指示を明確にしている。

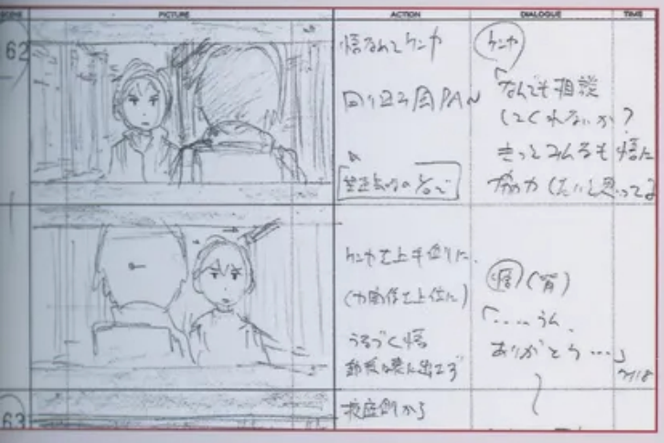




【同ポ・兼用】

あるカットと同じポジションにカメラを据え、同様の構図を繰り返して使用することを同ポ（同ポジション）と呼ぶ。絵素材を兼用できるため省力化にも繋がるが、安易に使用すると手抜きに見えかねない。本作では時間跳躍をしている表現として、あえて同ポを使用。悟が同じ時間を繰り返していることが、より視聴者に説得力を持って伝わってくる。





【ロトスコープ】

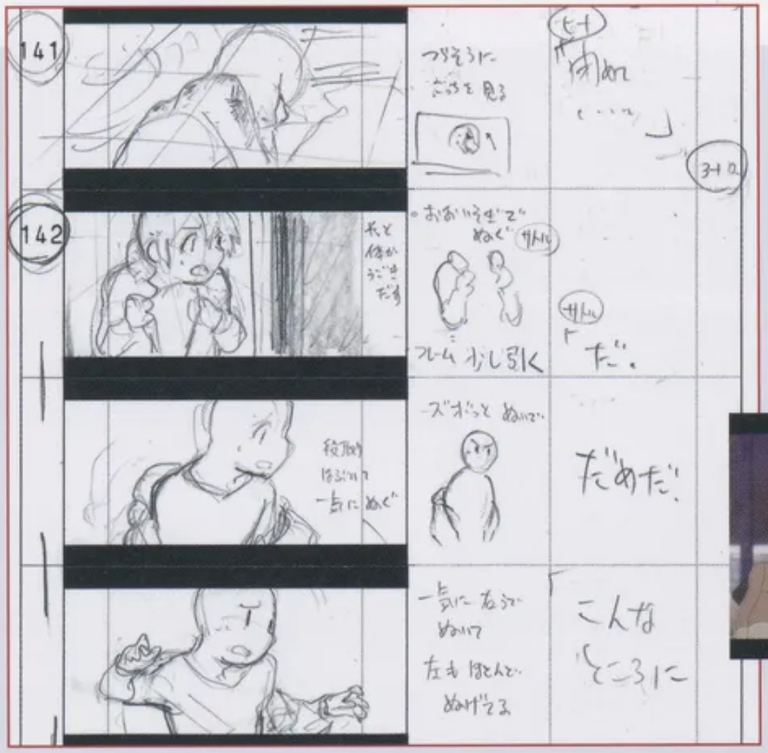
CUT60にて「必要に応じてロトスコープ作業」とある。ロトスコープとは、実在のモデルの動きを撮影、トレースし、アニメーションとして使用する手法のこと。このシーンは、調理中の手元にロトスコープを使用することで、母親の実在感を深め、視聴者に「温かみのある特別なカット」として認識してもらおうという意図が見える。

第二話 掌

絵コンテ担当：石井俊匡

【上手と下手の入れ替え】

悟とケンヤを望遠気味に映しているこのカット。カメラがふたりを回り込むように動くことで、悟を挟んでケンヤが左手から右手へと移る。これは舞台における下手から上手への移動と同様の効果を狙ったもの。力関係が強いほうが上手に来るという舞台劇的な演出のメソッドで、そのまま悟の緊迫した胸中を表している。

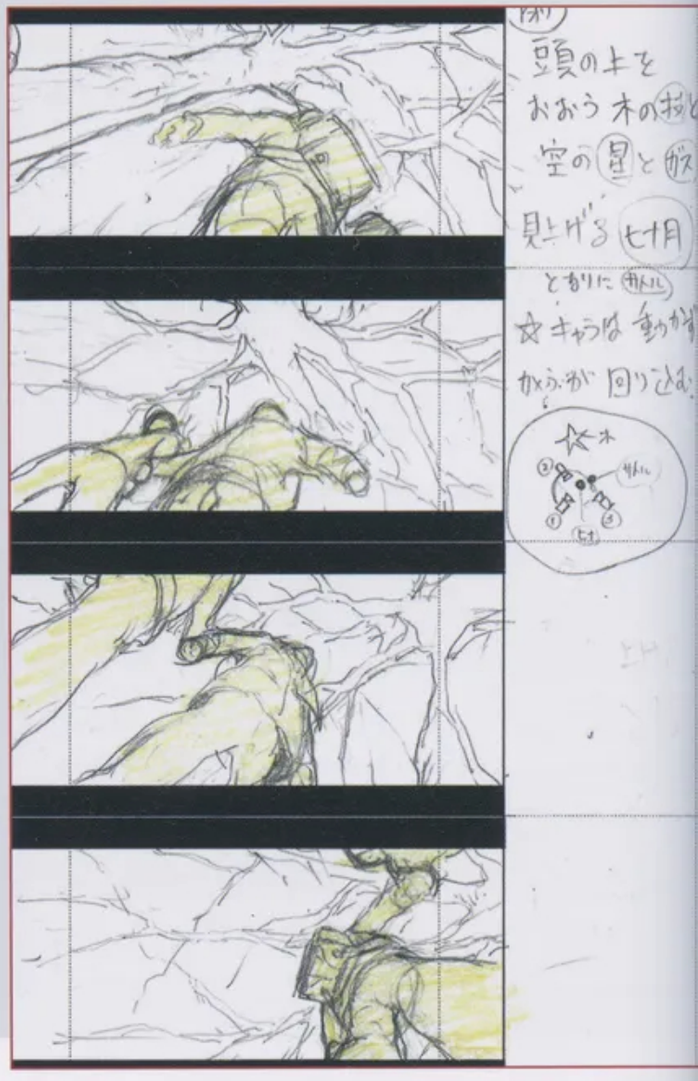


【人物芝居の指定】

悟がボロボロの雛月に、自分の服を着せようとしている。慌てる悟の芝居
容が絵によって事細かに記されているが、さらに右側の項目にも補足が
る。このカットの重要性から、絵コンテの段階で芝居の設計を立てている
だろう。ちなみにこの第3話で、絵コンテ・演出の鹿間氏は作画監督も兼任
アニメーターとして、芝居に対する意識の高さを感じさせる。

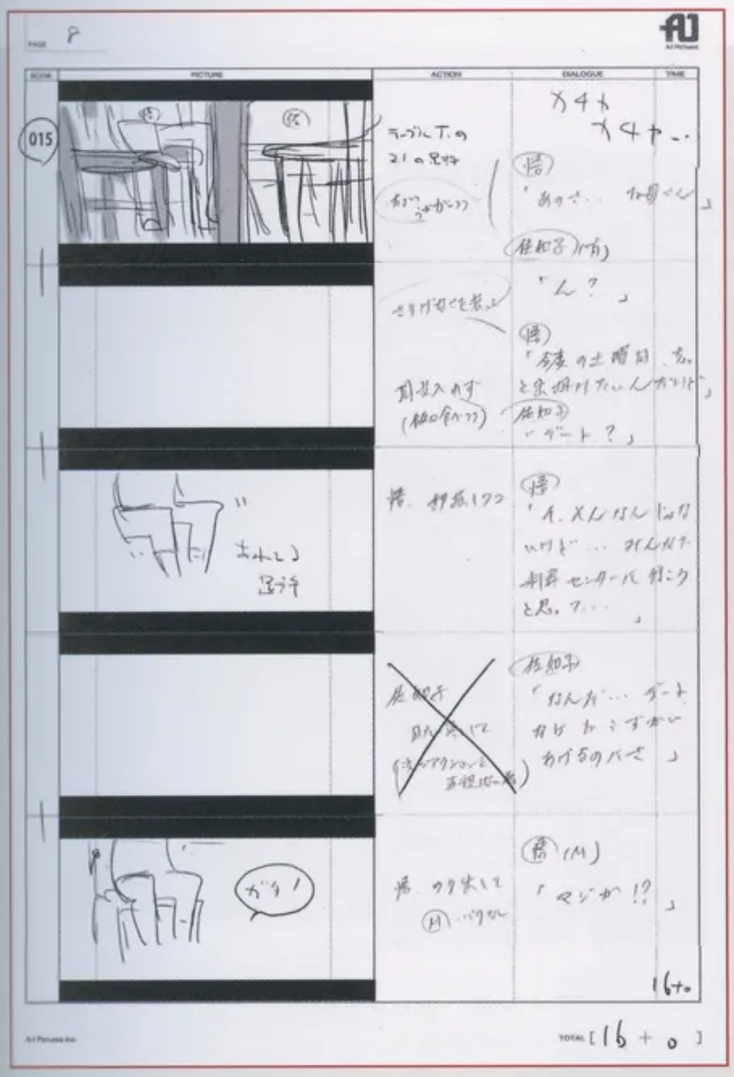
第三話 痣

絵コンテ担当:鹿間貴裕



【回り込み】

第3話のハイライト、“クリスマスツリー”のカット。本作は回り込みがさまざまなシーンで効果的に使用されており、他に第1話のラスト前などもその代表的なカットといえる。ここでは、カメラが下から煽るように据えられ、悟と雛月の周りをグルリと回り込む。カメラがどのように移動するのかの詳細な指定も描かれている。



【足の芝居】

人物芝居の中でも、本作で目立って見られるのが「足の芝居」だ。ここは佐知子に対し、雛月とデートすることへの伺いを立てようと、悟が緊張しつつ話すカット。足の動き方によって、悟の心情がどのように変化しているかが、如実に視聴者に伝わってくる。この作品においては“足は口程に物を言う”のである。

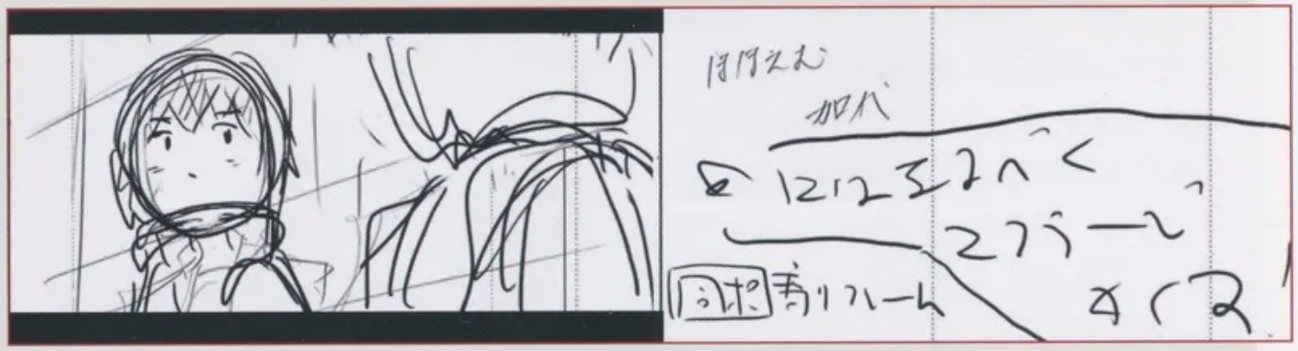
第四話 達成

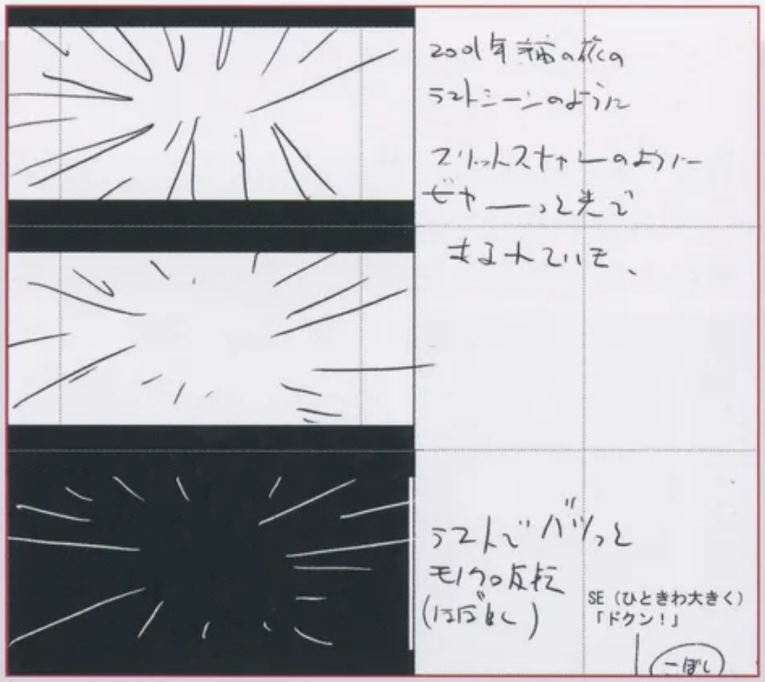
絵コンテ担当:綿田慎也

【孤高の雛月】

「口はなるべくマフラーでかくす!」の監督チェックが目を引く。監督は、雛月を“デレ”させたくないようで、以下のようにコメントしている。

「雛月はこんな軟弱女じゃない! 誇り高い人間だ! と思ったんです。ツンデレではないんですよ。むしろアニメの歴史的文脈においては、突然変異的なキャラなのかも。だからそこは大事にしてあげたいんです」。





【映画についてのコメント】

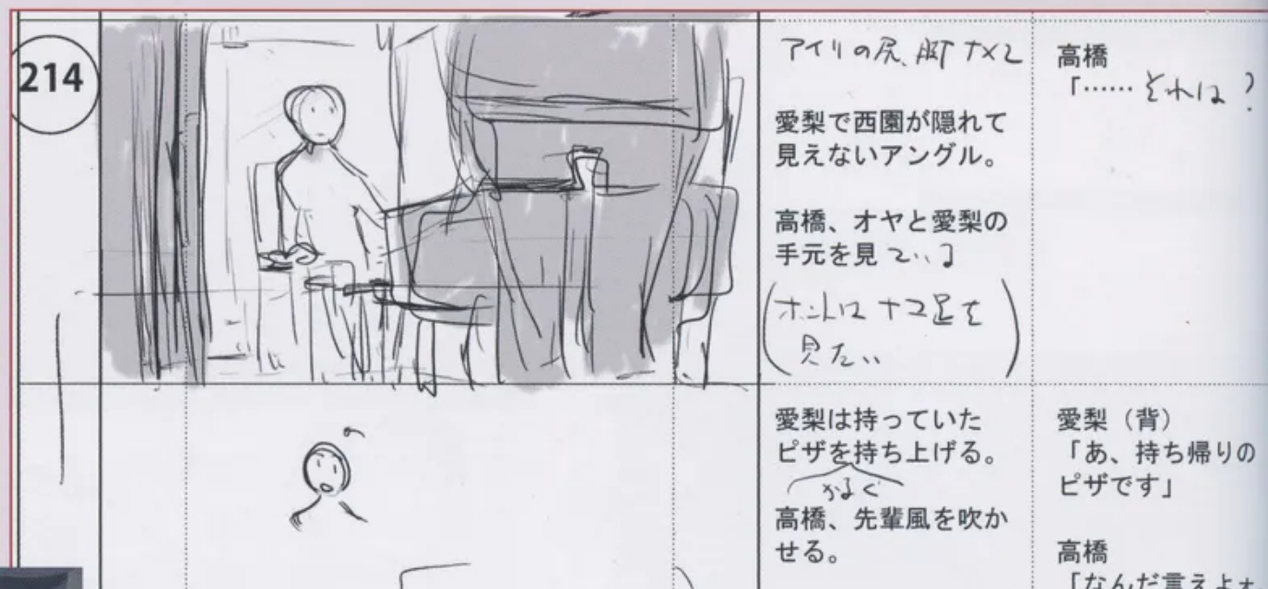
絵コンテに具体的な映画からの手法が指示されている場合もある。このカットでは『2001年宇宙の旅』について言及。スタンリー・キューブリック監督の歴史的名作である本作は、様々な映像手法を駆使したことでも知られている。劇中で「スターゲート」を通過する際に光の洪水のような効果を生んだ「スリットスキャン」という単語が、このコンテにも記してある。

第五話 逃走

絵コンテ担当:平川哲生

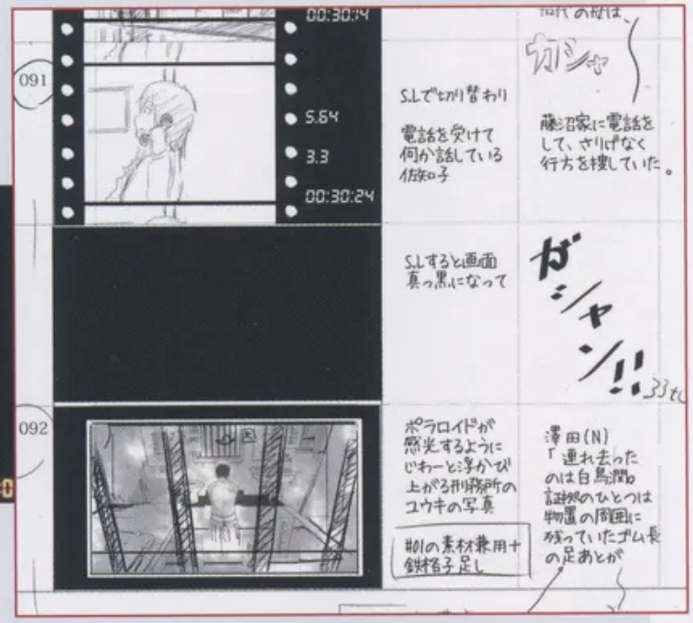
【足フェチの高橋】

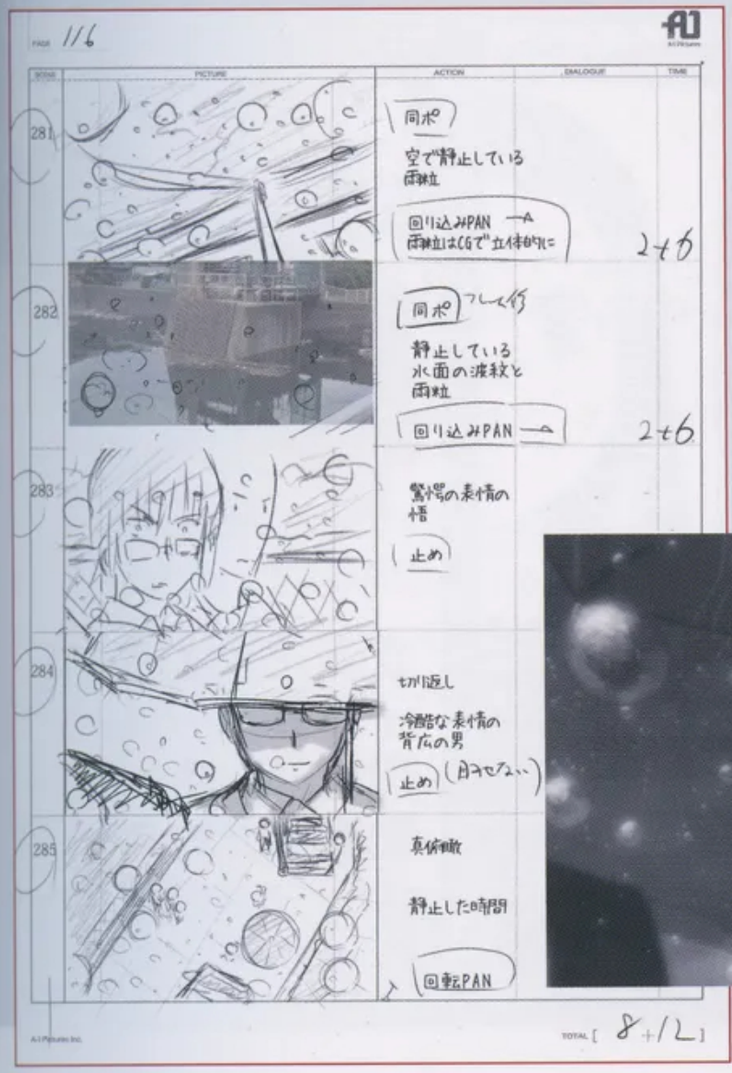
何気なく高橋が愛梨の手元を見るカットだが、絵コンテには(ホントはナマ足を見たい)という衝撃の事実が。確かに愛梨の尻と脚がカメラ手前に目立つように配置されているのだが…。さらにCUT216において、高橋はチラチラと下を見る仕草をするが、これも(足を見ている)という注意書きが、CUT218に至っては「ロリコンである」と結論付けられている。



【フィルム風のイメージ】

ここでは右側に日付とタイムコードが記され、アナログカメラのフィルムを彷彿とさせる演出がされている。さらにCUT92においては、ポラロイドが感光するように、ユウキさんの写真が浮かび上がる処理。これら一連の描写はノスタルジーを喚起させつつ、説明事項の提示が単調にならないための映像的仕掛けと言えるだろう。





第六話 死神

絵コンテ担当:森大貴

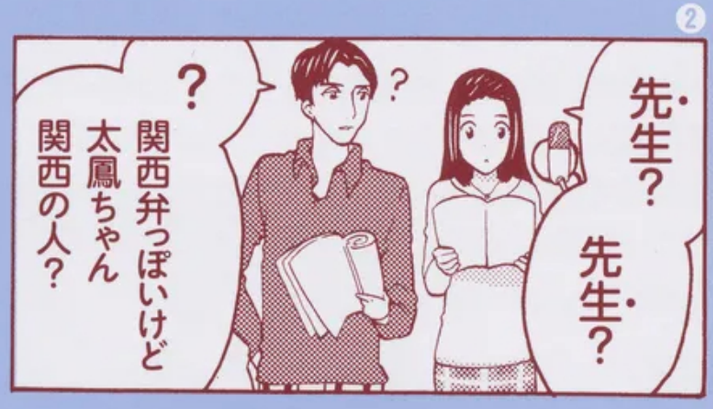
【静止した時と帽子の男】

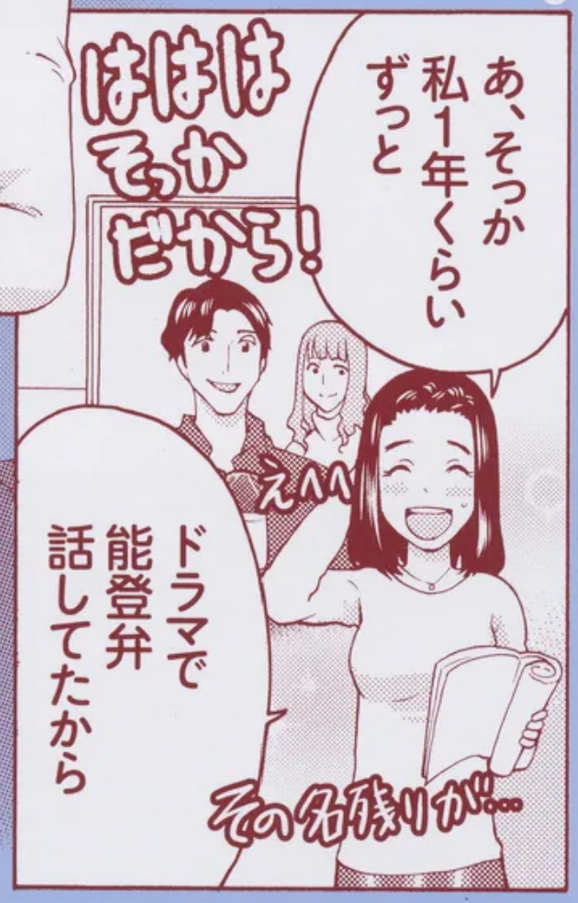
悟の周囲が一瞬静止したかのようなこの特異なシーンは、彼の衝撃の度合いを如実に表しつつ、このあとに再びリバイバルが待っていることを予感させる秀逸な演出となっている。第1話で触れた「同ポ」も効果的に使用され、さらにCGで描くことで、空中で静止している雨粒が立体的に表現されているという、芸の細かなカットとなっている。

アフレコ再上映（リバイバル）①

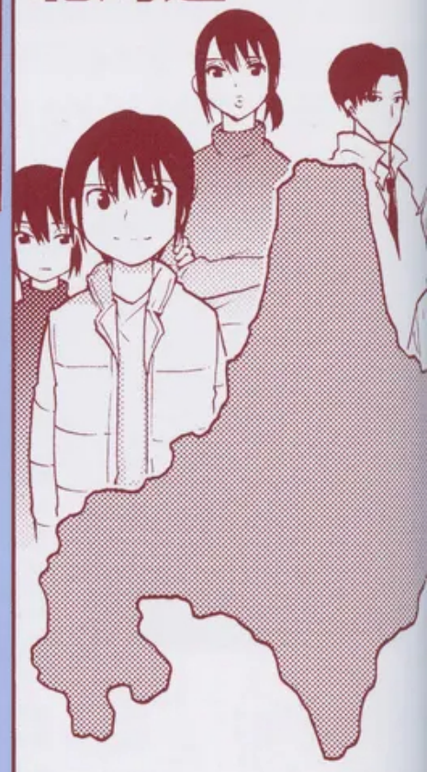
高木秀栄

藤沼悟(10歳)役
土屋太鳳





『僕街』の舞台
北海道!!



北海道弁は独特な
イントネーション
現場でも盛りあが
話題だったようで

高木秀栄……漫画家。三部けいのアシスタント。
『REVOLT』(原作:草下シンヤ)コミックス①
好評発売中!(Kadokawa Comics A)

『僕だけがいない街』
三部けい（原作）×松宮庸典（担当編集）インタビュー

自分が大事にしている部分が損なわれず、アニメも作られるんだと思いました（三部）
スピリットとして、アニメは完全に漫画と同じだと思っています（松宮）

出会いはコミックマーケット

―― そもそも、三部さんと松宮さんが初めて出会ったのはどこだったのですか。

松宮　最初にお会いしたのは、コミックマーケットだったと思います。

―― それはまた、面白い場所ですね。

松宮　はい。兼処敬士（かねさだけいし）さん【注1】にご挨拶に行った時「三部です」とご紹介を受けたのが最初かと。その後、10年間くらいただお話したりする仲という関係性がずっと続いていたんです。

―― 三部さんは同人誌イベントがお好きなのですか？

三部　ええ。人に会いに行く感というのが凄く楽しかったんですよ。友達に会うために出るというのも大きかったです。とはいえ、最近は忙しくてコミケもずっと出ていないんですけど。

―― それほど忙しいと同業者と会う機会もないのではないですか。

三部　今は誰にも会わないです（笑）。だから、こういったインタビューがあると楽しいんですよ。

松宮　この2年くらいはその状況が加速しているみたいな感じですよね。

―― 後書きで書くこともなくなっていきますね（笑）。

三部　家の中のことと子供のネタばかり増えるっていう（笑）。

三部けい作品恒例の後書き「非日常的な日常」は、コミックスにおけるお楽しみのひとつでもある

松宮　夜中にバッと出かけるのも無理になってしまいましたね。

三部　子供がいなかった頃は、原稿が上がったら深夜の２時位に野島崎とか千葉県の突端まで行って、灯台を見て、「真っ暗だなぁ」なんて言って帰ってくるんです。その上で昼間にまた行く（笑）。

――　ええ？　二回連続で行かれるんですか？

三部　寝て起きて昼間にもう一度行くんですよ。昔は「今、あの人のところが締め切りらしいよ。もう終わったかな？」「終わってないなら、みんなで手伝いに行けば一瞬で終わるんじゃない？」なんて言って、急に伺ったりして。お酒をたくさんいただいたりしました（笑）。

松宮　一緒に旅行へ行かれていた方たちも、結婚されていたり、周りの状況も変わっていったんだと思います。それぞれの時間が決まっていくので、難しいですよね。

――　松宮さんは、どういう経緯で三部さんのご担当になられたのでしょうか。

松宮　僕は前にいた会社をある事情で辞めたんです。その事情とは、「累計 100 万部のコミックスを作った！」と僕の友人が言っていたので「自分もやりたいな」と……そんなくだらないものだったのですが（笑）。

――　それで角川書店（当時）に移られたんですね。

松宮　はい。三部さんはその頃『神宿りのナギ』【注２】を執筆されていたのですが、僕が入って数ヶ月で、担当編集者が辞めることになったんです。そこで、僕はもともと三部さんを知っていたので、「松宮くんが担当ね」ということになって、引き継いだという経緯です。……今だから言ってもいいと思うのですが、引き継いで最初に、上司から言われた仕事が、「『神宿りのナギ』を終わらせて欲しい」というものだったんですよ。

――　……相当厳しい話ですね。

松宮　「それは辛すぎるよ…（涙）」みたいな感じでした（笑）。

――　巻末を見ると１巻目と２巻目以降で担当者名の部分が変わっています。

松宮　そうです。１巻と２巻の間がぽかんと空いているんですよ。当時三部さんは『鬼燈の島』【注３】も連載されていて、そちらが好評だったこともあり、『神宿りのナギ』を終わらせようということになったんだと記憶してます。

三部　もともと、『カミヤドリ』【注４】を完結させるために（『神宿りのナギ』は）始めたものなんですよ。ですから、何冊になるか分からないという始まり方だったんですよね。普通に描いていけば、必然的に長くなってしまう。「だったらこれでズバッと終わろう」という話になったんです。

『神宿りのナギ』コミックス第１巻

『僕だけがいない街』と横溝正史的なイメージ

――　二人のあいだで最初に『僕街』の新連載企画が持ち上がったのは、『ナギ』をやっている時ですか。

松宮　いや、違いますね。確か……当時どこか古めかしい喫茶店でお話した記憶があります。「次に連載する時は、また改めて考えますか」ぐらいの話で、一旦『神宿りのナギ』を終了したんです。それから三部さんが『鬼燈の島』の後の『魍魎の揺りかご』【注5】を始めることになって、しばらく開きました。僕の記憶だと、その後に三部さんから「ヤングエースでやる連載を思いついたから、打ち合わせをしませんか」とお話いただいたんです。それは是非見たいな、と思って打ち合わせに臨んだのが始まりだったと思います。

三部　その当時スクエニ（スクウェア・エニックス）と、エースで描いていたものを入れ替えたかったんですよ。「これは逆だろう」とずっと思っていたんです。

――　逆、とはどういうことでしょう？　それは雑誌のイメージと照らし合わせると、ですか。

三部　いえ、出版社のイメージですね。昔から横溝正史さん【注6】の小説が好きだったんですよ。市川崑監督の金田一シリーズ【注7】が凄く好きで。アルバムもいっぱい持っていて（笑）。普段から聞いてしまうぐらい好きなんです。

――　なるほど。横溝さんの小説は角川から出ているから……。

三部　そうなんです！　その角川のイメージとして「こういう作品は角川で描きたい」とずっと思っていたんです。スクエニで書くのなら、『カミヤドリ』のような作品のほうが、自分のイメージする出版社の方向性に合っているんです。「『魍魎』が終わったら、こういうものを角川で始めたい」と思ってはいたんですよね。

――　では、その頃が構想に着手し始めた時期なんですね。

三部　ああ、いえ、『僕だけがいない街』の元になった構想はもっとずっと昔からありました。いつからだったかな……。『鬼燈』の最中で、次の連載用に考えていたかもしれません。

――　ではもう7、8年前ですか。その構想はどんなものだったのでしょう。

三部　過去に戻って人を助けたり、犯人を見つけ出したりという部分は一緒です。でも、そこに全く違う要素が入り込んでいたんです。『僕街』よりもさらに殺伐としていました。タイムスリップして、津山三十人殺し【注8】の現場のようなところに行くんです。そこで幼かった頃のおばあちゃんと一緒に逃げて。逃げながら事件を追って行くと、巷で言われていた犯人は実は違っていたというような……。

――　今の『僕街』とは全然違う作品のようですが、その頃の要素は残っていたりするのでしょうか。

三部　要所だけは今の『僕街』にも残っていますね。最初はモチーフがあると読者が分かりやすいかなと思ったんですよ。昭和初期とか、そういう時代も分かりやすくて、そこに中学生くらいの少年がポンといて、例えばその時代にないものを彼は持っているとか。あるいは、現在の知識を使って、物を作り出すとか。そのあたりは、『僕街』で悟がカメラからスタンガンを作ったような部分に残っています。でも、考えているうちに、今度は全然真逆の作品になったんですよね。極端にヒューマンに偏った、現実的なものになっていったんです。

――　一度大きく変わっているんですね。

三部　ええ。でもそれもちょっと違うということで戻したのが『僕街』なんです。「リバイバル」みたいなキャッチーな案もこのあたりで足されました。

――　しかし、角川は確かに横溝正史的なイメージがありますが、ヤングエースという誌面はもう少しライトな雰囲気ですよね。

松宮　そうなんですよね（笑）。僕が最初にオーダーしたことがひとつだけあったんです。ヒューマンドラマ過ぎると、ヤングエースで売るイメージができなかったので、「サスペンス的な要素を足しましょう」とお願いしました。

――　今でも、ヤングエースの中では渋い方ですよね。

三部　むしろ（紙面の多様性という意味で）助かっていると角川の編集さんに言われたことがあります。自分としても、そういう作品も雑誌の中で絶対必要だと思っていましたし。他と自分がバッティングしていないので、その方向を突き詰めていくほうがいいだろうということも、ずっと思っていたんです。

――　なるほど。以前に連載されていた『鬼燈』であったり、『魍魎』であったりは、いわゆるサスペンス的な要素がある作品でした。漫画としてサスペンスドラマというジャンルを描きたいという気持ちはご自身の中で大きいのですか？

三部　多分そうだと思います。捻るのが好きなんですよ。漫画を読んでいて、「あっ！」とショックを受ける瞬間が楽しいんですよね。それを人にも楽しんでもらいたくて描いています。

――　三部さんのサスペンスには驚かされることもしばしばです。

三部　でも、驚きだけじゃなくてもいいんです。印象的なシーンがあれば。例えば普段読んでいない雑誌をパラっと見た時に「これは面白そうだ」と思える漫画は、やっぱりあるんですよね。そういう作品は印象的なシーンや言葉が必ず存在する。前に参考にしていたのですが、シェイクスピアの言葉を、いろんな作品から切り取ってくれている本があるんです。シェイクスピアはどこを切っても名場面ばかりなんですよね。そこを目指している、と言いますか、意識はしていますね。

――　三部さんがこれまでやられてきた作品からの、『僕街』への影響はあったりしますか。

三部　凄くあると思います。デビューしたての頃って、何もできていないんですよね。常に実験を繰り返しているような状態で書いているんですよ。それである時から演出面を意識するようになって、キャラクターをどう見せようかと考えた時に、底意地の悪さを『魍魎』の途中から出していったり、キャラクターの性質を表にガンガン出していったんですね。

――　チャレンジをされたんですね。

三部　そういうことを常にやっているので、書いてきたものはある意味全部『僕街』に反映されているとも言えますね。『パズル』【注９】をコミカライズしているのですが、あれもコミック版のど真ん中で犯人が分かるんです。これで犯人が分かってもいいやと。その後どう面白く見せられるかが大事だと思いながら描いていきました。そこで面白く読ませるような工夫をしていったのですが、当然『僕街』にも活きていますよね。

――　確かに、『僕街』も真犯人が分かってから、物語の様相がガラリと変わりますよね。

「パズル」コミックス第１巻

三部　『魍魎』をやっている時は特にそうだったのですが、アドリブで描くというのも大事だと思ったんですよ。今考えている形がベストじゃないなということを思ったんです。

松宮　本当に、『魍魎』を直前に連載されていてよかったなと思います。『鬼燈』と『魍魎』の振り幅の大きさが『僕街』にものすごく効いているなと。

三部　さらに遡ると、そもそも自分は基本的には人を描くのが楽しいんですよ。このキャラクターはどういう人間なんだろう？　というのが根本にあります。「これを見たらこのキャラクターはこういう行動を採る」であったり、「これが起こったら彼は変わるか、変わらないか」を考える。『テスタロト』の時から常にその状態です。あの作品は、生き様みたいなものを描こうというテーマを上手に描けなくて、途中で終わりましたけど(笑)。

――　でも、心情を追いつつドラマを作っていくというのは、その頃と変わらずということなんですね。

三部　そこは変わりません。そのうえで、欠点を補うというか、自分なりの成長の仕方を見つけて、クリアしていくというやり方をしていると思います。

松宮　以前三部さんが「半年後はもっとできる。だから今、全部やる」とおっしゃっていたんです。まさにこの言葉通り描かれ続けていると思いますね。

あえて幅を保たせるストーリー制作法

――　連載を始める時、こういう話を何回くらいでということの目安は決めるのですか。

三部　具体的に分量を先に決めたりはしないんです。でも、今の８巻構成は想定していたより長いです。基本的に全力で毎回ネームをやっていると、長い構成は保たないです……。

――　確かに三部さんの作品で 10 巻以上は……。

三部　ありませんね。

――　最初の打ち合わせの時点で、最終回のイメージはあったのですか？

三部　漠然と読み味のイメージくらいしかなかったと思いますね。でも、幸せな未来を予感させる感じになるはずということは、その当時からイメージしていたと思います。

――　真犯人も、まだその時点では決まっていなかった？

三部　決めきってはいなかったです。連載を始めた時には、ほぼ「このキャラ」という想定はありましたが、他の可能性も残していたかったので。しっかり犯人を固めるのは、最初のリバイバルの時までででいいという感じだったんですよね。１巻の段階である情報は、「過去にこういうことが起きた」、「冤罪で投獄されている人もいます」、「知り合いが死んでいる」というぐらいだったので、犯人が決まっていなくても、問題なく描けるはずだと。そこをやっている間に、犯人も固めていった……という感じでしょうか。大体において自分は、一番色濃くあるものが先に存在して、本当にそれが一番いいかどうかを検証するんですよ。それを毎回やるんです。ですから、犯人についても、全ての人間を犯人にしたらどうなるかということはシミュレートしていました。

――　それは大変な作業ですね……。

松宮　三部さんの作品へのアプローチは、イメージが決まっている ABC というのがまずあるとします。でも実際にそれを決める・使う段階になった時、E や F など新しいアイデアが出て、新しいアイデアの方が良いと思った場合、躊躇なく ABC を捨てるというものだそうです。なので、以前から考えていたアイデアを捨てるということも結構されているのではないかと思いますね。

――　使われなかった設定や、ストーリーもあるのですか。

三部　それはもう。ノートにいっぱい色々書いていますが、使われなかった部分は相当あります。

――　今犯人の話になりましたので、もう少し。犯人のバックボーンみたいなものはいつの段階で決まっていったのでしょうか。

三部　それは一肇（にのまえはじめ）さん【注 10】との打ち合わせが大きかったんです。

――　ああ、『僕街』のノベルを担当されている一肇さんですね。犯人についてのお話を書かれているんでしたよね。

三部　コミックス３巻ぐらいの段階で、ノベル版のディスカッションをしたんです。『僕街』が大好きということだったのですが、もう一肇さんの中で犯人像が完成しているんですよ（笑）。

松宮　アメリカのオタク系イベントで、現地の熱心なファンが原作者さんに、「これはこういうことですよね！」みたいなパターンがあるみたいなんですけど、一肇さんはかなりそれに近かったかもしれません（笑）。あのディスカッションも作品にとって凄く良い効果があったと思うんですね。真犯人に対する我々のエネルギーが爆発したというところはあると思います。

三部　文章が凄く上手いので、ぐいぐい来るんですよね。だからありがたかったですし、キャラクターをここまで愛してくれるということについても、もの凄く嬉しかったです。

松宮　こちら側も「ちゃんとやらないと！」というのが高まりました。少しでも手を抜いたらすぐバレてしまう。一瞬も気が抜けないみたいなところでモチベーションも上がりました。

三部　「これからどうなるんでしょう」と興奮気味に言われて「この人が満足するにはどうすればいいんだ！」と。

――　（笑）。最初の読者のハードルが高すぎるんですね。

三部　自分より上の方にいる人たちがそんなことを言っていて、その上をいくために必死に背伸びして描くようなところがありました。

松宮　考えるきっかけを別のメディア化によって得られた部分はありました。僕はアニメのシナリオ会議に毎回参加できたことも、漫画にはすごくプラスになったと思います。だから、メディア化に関しては本当に感謝しかありません。特に A-1 Pictures の渋谷（晃尚）さんは最初から設定面についてズバズバと言ってくださって。僕が気にしていなかったところをいろいろ言ってくれたのが、凄く役に立ちました。

悟というキャラクターに込めた想い

――　主人公の悟についてはいかがですか。彼の踏み込むという部分は、大事なテーマのひとつでしたね。

三部　そうですね。……なんというか、言葉の力を描きたかったんですよ。「言っているうちに本当になる」というのは、その通りだと思うんです。自分はずっとプロで食えているということが、いまだに信じられないなんです。周りには自分よりずっと上手い人がいるんですよ。子供の頃から、10 人くらい集まっていても、自分が下から２、３番目だった。

――　そうなのですか。

三部　ええ。でも、みんなどこかで理由をつけて辞めていったり、最初からやらなかったりだった。それはもったいないし、自分としても残念なんです。諦めないでやってみたらいいのに、と何度も思ってきました。だから「まず口に出してみて、やってほしい。それは凄く大事だよ」ということを伝えたかったんですよ。今お話したようなことを、悟には体現してもらっているつもりです。

――　なるほど。

三部　そんなことを思うようになったのも、自分に子供ができたからかもと思うんです。子供が中学生くらいになった時に、きっとこの作品を読むはずだろうと。そうであるなら、読んだ時にいいものを見たと思って欲しい。メッセージみたいなものを込められたら、と思ったんです。

原作第１話で愛梨が口にする印象的な言葉

―― その後、連載を始めて、最初に反響があると感じられたのはいつ頃なのですか。

松宮　２巻の発売を計画した時です。今は異動されてしまいましたが、「これ面白いから２巻で仕掛けようよ」と言ってくださった営業さんがいたんですよ。そこがスタートだと思います。その営業さんが「三部さんのお知り合いの方に帯コメントを頼めない？」とおっしゃられて。「荒木（飛呂彦）先生【注 11】のアシスタントをされてましたけど」、「ダメ元でお願いだけでもしてみたら？」という話があって、三部さんに相談したら「荒木先生に聞いてみますよ」と。その後、集英社さんから快く OK のお返事をいただいたんです。

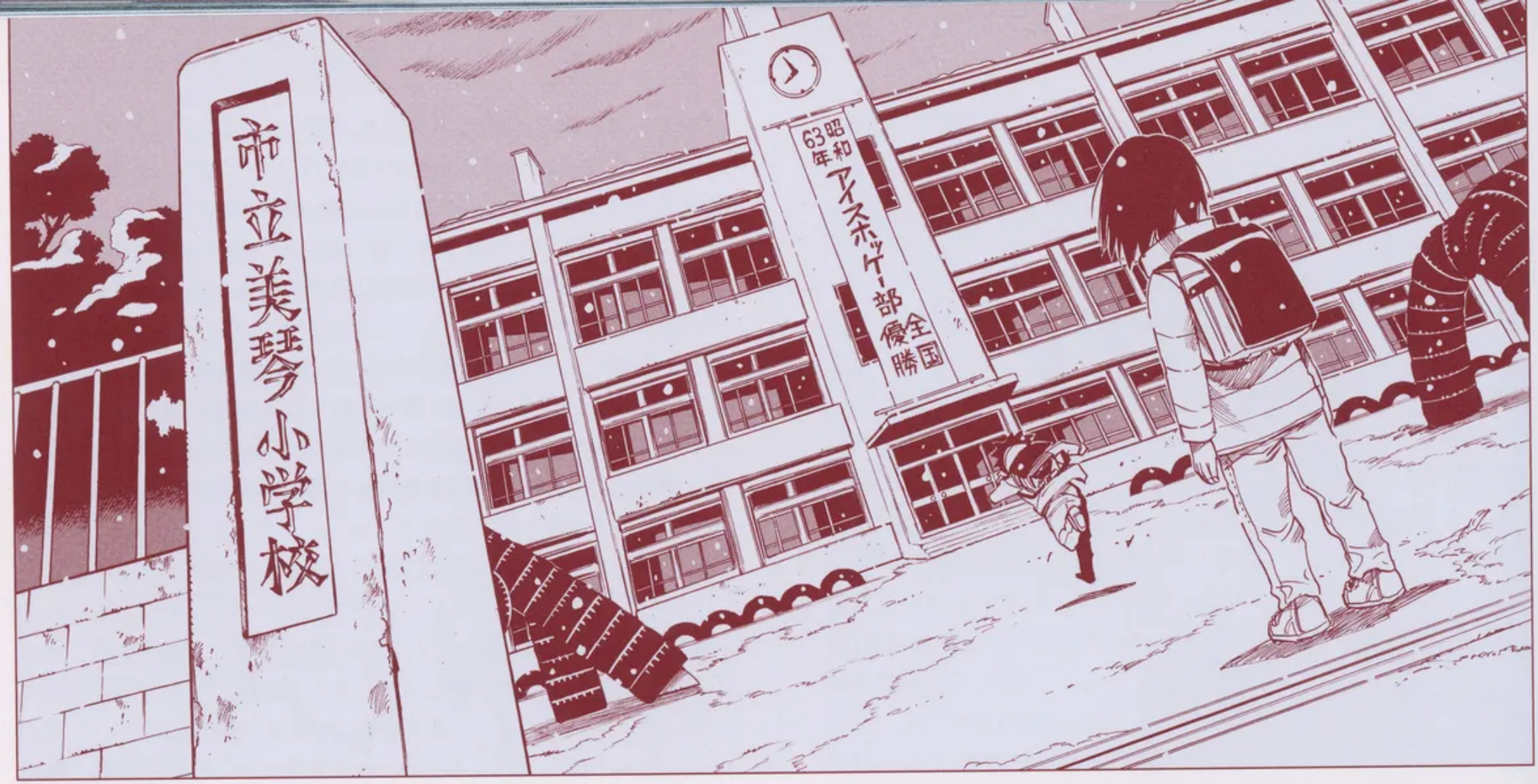
―― ああ、荒木先生のコミックス帯におけるコメントのお話はそこで出てきたんですね。荒木先生からの影響みたいなものはあったりしますか。

三部　絵面として、どの角度からでも頭の中で想像できるようになったことが大きいですね。荒木先生もいろんな方向から描くことが多かったので、そこに対応してアシスタントは絵を描いていかないといけなかったんですよ。そのおかげで空間的なものの見方ができるようになりました。

アニメ『僕だけがいない街』悟のキャラクター設定

―― 無茶な構図やパースの絵も描けるようになった？

三部　ええ。でも、そんな自分からしても、アニメーターの方の絵は上手いなと驚かされるんですよね。



第１巻最後は急転直下の展開。第２巻が気になって仕方がなくなること請け合い

―― おお、そうですか。どういったところにそれを感じられますか。

三部　最初にいろんな角度のキャラクター絵（キャラクター設定の三面図のこと）をいただいたんですよ。「これを見て漫画を描きたかったな」と思いました（笑）。自分が生み出したキャラクターでも、描きづらい角度が、やっぱりあるんですよね。俯瞰で見た時にどうしても足が小さくなったりする。そんな違和感が出るバランスになるものが、アニメ絵だとなんともないということがありました。アニメのキャラクターそのものも、イメージ的な違和感がなくいいなと思えました。みんな可愛かったです。

―― 話は前後しますが、コミックスの巻末をいいところで切るというアイデアはそもそも松宮さんから出されていたんですか？

松宮　１巻はここで終わりましょう、と提案したのは僕だったと思います。僕の仕事は、本当にそれだけでした（笑）。１巻の終わり方がうまくいったので、２巻もこうやって終わった方がいんじゃないかと、必然的にいいところで切るようになっていったんです。

―― １巻はもともと別のところで終わる予定だった？

三部　ええ。自分が考えていたのと、松宮さんが考えていたのとで違ったんです。自分は母親が死ぬところで終わりと考えていて、それ自体は（実際のコミックス終わりの）一回前なんですよね。３話くらい

描いた時点で、コミックス１巻の終わりが確定したので、そこからスピードが上がったんです。そのスピード感も良かったんですよ。そこからラストを決めつつ毎回描いていくような感じになっていきました。

「アニメを見て“やった!”と思いました」

―― では、そのアニメについて伺っていければと思いますが、お話が出たのはいつ頃だったのでしょうか。

松宮　映像化の問い合わせとして、一番早かったのは実写映画だったんです。ただ一番最初にいただいたそれは様子伺いくらいで流れたのですが、その後に映画のプロデューサーさんが、２巻が来月出るぐらいの時にいらっしゃったんですよね。その後、２巻が出た後すぐくらいの時に今度はA-1 Picturesさんから連絡が、みたいな感じだったと思います。

―― 監督との顔合わせはいつぐらいだったのでしょう？

松宮　やりますという話があって、比較的すぐだったような気がします。そこでもうご挨拶をというだけではなくて、すぐメモを片手に三部さんへの質問が飛ぶという状況でした。

―― 確かに最終回がどうなるのかといったことは、最初に聞かないと作りづらいですよね。三部さんはアニメ化すると聞いていかがでしたか？

三部　「無茶だろ」と思いましたね（笑）。内容もかなり渋いですから、アニメが好きな人たちに受けるのかという不安はありました。でも話してみたら、原作に対しての理解も深く、安心できましたね。

―― その後もアニメチームとはディスカッションを重ねられた？

三部　ええ。最終回についてのお話が多かったですね。結構振れ幅を持たせつつ描いているので、最後どうなるかは自分でもはっきりと分からないという面もあり……。

―― アニメを初めてご覧になられた時は、どのような感想を持たれましたか？

三部　最初見た時は「やった！」と思いましたね。そもそも凄く良いものができあがってくる感はありました。絵も少しずつ上がってきて、シナリオを読むじゃないですか。その時点から期待はしていたのですが、期待以上でした。１話目はよくこんな感じに収まったなと。自分が見ても違和感がなく、最後まで見られましたね。終盤のスピード感も良かったです。もちろん、２話以降も大好きで。ある程度描くべきところはじっくり描いてくれている感があって、もう何回も見ています。それとオープニングとエンディングも好きなんです。

―― 曲がですか？

三部　曲も絵も好きです。オープニングは見るたびに発見があるような仕上がりになっているなと。仕事が辛くなってくると、原稿をどかしてプレイヤーを置いてヘッドホンをして、それでまた描けるみたいな感じです（笑）。

―― なるほど（笑）。アニメのリバイバル表現は、漫画とはまた違った見せ方に置き換えられていると思いますが、そのあたりはいかがでしたか。

三部　リバイバルする際、一回ネガポジ反転になりますよね。その後イメージでフィルムが出てきて……あれは好きですね。自分の意思の及んでいないところで、何かが起きている感覚があるような感じ。不安をかきたてるような気がしてよかったですね。

松宮　３話や４話を見ると、監督が懸念されていたところが、うまく視覚化されているなと思いました。Xデーなんかは、漫画だと文字で見せることが出来ますが、アニメだとセリフとして流れてしまいがちなので、そこを黒バックに白字で大きく見せるとか、原作を知らない人が見てもわかりやすくなるようかなり工夫されているなと感じました。

黒バックに白文字で大きく「X デー」と書かれたカット。
視聴者に X デーを強く意識させる演出となっている

―― アニメとの関わりでいうと、今回キャストについてはいかがですか。

三部　自分は満島（真之介）さんと土屋（太鳳）さんの声が凄くいいと思ったんですよ。凡庸なキャラクター性もちゃんと現れていたし、二人の声のギャップがいいなと。「声に出てた…」と言う時に、同時に声を出すじゃないですか。これぐらいお互いの声質にギャップがないと、やっぱり活きないし、人選的には大正解だったんだなと思ったんですよね。他のキャラクターも含め、声を聞いて、違和感があるキャラもいませんし、みんないいと思いましたね。

松宮　僕はいい意味で違和感があったのは、ユウキさんですね。初めて聞いたときに、「凄くいいな」と思ったんですよ。失礼な言い方かもしれませんが、ユウキさんは主要キャラから少し外れますので、気にしていなかったところがありました。でも、あのどもりの感じや優しそうな雰囲気にはすごくやられましたね。

三部　1 話目の愛梨の声が、最初明るくて気さくな感じなんですよ。にも関わらず悟の家から帰る時の声には、さらに悟へ感情が寄っているように聞こえたんです。その微妙な変化に、「うわ、この人すごいな」と思って。実は声優さんのことはよく知らないのですが……。だけど、こんなに上手いんだと思わされました。

悟と愛梨の自転車二人乗りシーン。愛梨はここで悟のことを初めて「悟さん」と呼んだ

―― アフレコを見学されたとのことですが、どんな印象を持たれましたか？

三部　凄い指示が飛んでいるじゃないですか。3 話目だったかな。例えば、「こいつ！」に殺気がこもりすぎていると注意が出たり。それがOK かどうか別にしても、俳優さんは二人とも違うパターンをポンポン出してくるし、演技者なんだなっていうのを凄く感じましたね。

原作もアニメも本質は同じ

―― アニメならではということで、色味についてはいかがですか？　漫画だとモノクロですから、映像的に膨らませる余地があるかと思うのですが。

三部　自分は色のイメージも、カラーを描く段階まであまりないんです。完全にモノクロでどう表現するかしか考えていない。『僕街』では雛月の赤だけ決まっていました。その点では「あ、こんな風に色がつくと見やすいな」であったり、「キャラごとに色分けされているのはいいな」と思ったりします。「この色、俺も使おう」とか。

―― 空間的なライティングにおける色味については、どうですか。

三部　アニメで自分が好きだったのは、公園で悟が引きで立っていて、「それが雛月を見た最後の姿だった」というシーンですね。その色味が好きです。雰囲気が出ていると思いました。それと全体に空気は北海道を連想させるなと思います。一段薄い、ブルーグレイをかけた感じは北海道の空の色そのものなんですよ。窓の外が雪の反射で光っているところが、北海道っぽいんです。はっきりと室内と室外で色温度が違うというのがよく出ていると思います。北海道では冬の昼間は眩しいからカーテンを閉めるんですよね。暗いところから一歩外に出たらもう目が痛いぐらいなんです。

昭和63年当時、悟は公園にてひとり佇んでいる雛月の姿を見た…

―― アニメの演出的なところで他に気が付かれたことなどあったりされますか。

三部　これも漫画で使おうかと思ったのですが、第2話でカズが悟をポンと押した次の瞬間、雛月の前に立っている、ああいう時間の飛ばし方が好きですね。「あ、これでいいじゃないか」と思いました。そういった部分は、時間短縮でやむなくやっていることも多いと思うのですが、アリだなと。自分も、もっと大きな絵を作りたいなと思った時に、どこか別のコマを詰めたりしますし、可能なら文字や台詞を詰めて、取っていきたいということは常に思っているんです。

第2話にて、カズに背中を押された次のカットでは、すでに雛月の前にいる悟の足元が映される

―― あの「バカなの？」の前後はちょっとコミカルですよね。

三部　ええ。コミカルというところですと、アニメは音で雰囲気を少

し和らげてくれたりしますよね。その緩急みたいなものもよかったです。音でも表現できるんだと。やはりずっと緊張したままでドラマが進行すると、視聴者も保たないと思うんですよ。音で少し和らぐとギャップ的な部分が生まれていいなと思います。まあ、普段アニメを見ている人にとっては当然の話かと思うんですけどね(笑)。

―― 松宮さんは演出面で印象的なシーンはどんなところですか？

松宮 僕は一番最初の 1 話。やっぱり最後の長回しとカメラ視点が大きく回り込むところですね。本当に怒涛のシーンで、スタッフさん達側からすると大変だったということでしたが、漫画とは違う表現じゃないですか。あれをそのままコマ送りで漫画をやると、もの凄くつまらなくなってしまう。インパクトを出したいとなった時に、ああいう回転するカメラワークをやるというのは凄いなと思いました。1話が僕の中で「勝利」していると勝手に思っている部分は、ラストに怒涛の展開を見せて、昭和 63 年に戻ってしまったということが判明して真っ暗になってから、ASIAN KUNG-FU GENERATIONの「Re:Re:」が流れるところですね。これは何回見ても凄くハマっていると思いました！

―― 映画らしさを感じますね。

松宮 そうですね。でも一方で2話は話としては比較的動きの少ない、盛り上がりの少ないイメージの回なのに、めちゃくちゃ面白かったのも凄いかなと。

―― そうですか。2話はどんなところが？

松宮 「これだ」ということではなかったと思うのですが、全てのシーンが丁寧に描かれていて、1話との落差も強く感じました。

―― 割と日常のシーンがありますよね。

松宮 はい。ここでキャラ性がしっかり描かれているからこそ、この先登場人物が辿っていく道筋が説得力を持つと感じました。そんな感動がありました。1話で大きくジャンプしているのですが、2話ではきちんと屈んでいるような感じです。

―― 先生の視点から、アニメーションのラストについて、ご自身が描き終えた漫画版ラストとの違いや所感を伺えますか？

三部 ニュアンスは同じだと思いますよ。もともと漫画で言う読後感がなんとなく想像できていたのですが、その点でおそらく自分の漫画と遠くないものができるだろうなとは思っていました。シチュエーションは違いますが、ラストシーンの場所や、やってくる人間もほぼ一緒です。自分が大事にしている部分が損なわれない形でちゃんと作られるんだなというのを、ここまでのアニメを見て思えています。

―― 松宮さんとしてはいかがですか？

松宮 アニメのラストは僕の中ではすごく好きなんです。三部さんにも監督にもお話したのですが、スピリットとしてアニメは完全に漫画と同じ方向を向いていると思っています。漫画でいう紙幅、映像では尺の差で、違う表現方法がとられているだけという感覚ですね。

―― では、本質としては、その精神を継いでいるといっていいわけですか。

三部 伊藤監督なり、岸本さんなりの解釈で、増幅させていると言ったほうがいいかもしれないです。満足という言い方をすると合っているか分からないですけど、こんなにいいものができるなんて…幸せな感じですよ。

【注 1】兼処敬士
イラストレーターで、三部けいの妻でもある。

【注2】『神宿りのナギ』
「エースアサルト」「月刊少年エース」にて 2007 年より連載。『カミヤドリ』の続編として連載された。

【注3】『鬼燈の島』
とある秘密を知ってしまい、施設「鬼燈学園」を脱出しようとする子供たちと、大人との決死の " 鬼ごっこ " を描いた、サスペンス・ストーリー。「ヤングガンガン」にて 2008 年より連載された。

【注4】『カミヤドリ』
人を怪物に変える奇病・カミヤドリに侵された人々を、少女とともに狩っていくエージェントの戦いを描いたアクション作品。「月刊少年エース」にて 2003 年より連載された。

【注5】『魍魎の揺りかご』
沈没寸前の船の中、突如出現した殺人鬼に怯え、脱出を図る修学旅行生たちの姿を描いたサスペンス・ホラー。「ヤングガンガン」にて 2010 年より連載された。

【注6】横溝正史
小説家、推理作家。日本の風土とロマン性を結びつけた作風を特徴としており、その作品の数々は、日本探偵小説界において今なお大きな影響を及ぼす。代表作に『本陣殺人事件』『八つ墓村』『犬神家の一族』『人形佐七捕物帳』などがある。

【注7】市川崑監督の金田一シリーズ
映画監督。代表作に『ビルマの竪琴』『野火』『東京オリンピック』『細雪』など。「金田一耕助」シリーズは、1976 年の角川映画第一弾で、横溝正史原作の『犬神家の一族』を皮切りに市川崑が手がけた一連のシリーズのこと。

【注8】津山三十人殺し
1938 年、岡山県の集落で発生し、28 名が即死、5 名が重軽傷を負った日本犯罪史上に残る大量殺人事件。犯人の都井睦雄は逃走した後自殺した。

【注9】パズル
武装集団に占拠された特進クラス。彼らの要求は校舎内に隠された 2000 ピースのパズルを探し出せというものだった。その要求に対し奔走する高校生を描いたサスペンス。山田悠介の小説を原作とし、「月刊少年エース」にて 2007 年より連載された。

【注 10】ニトロプラス所属の小説家。

【注 11】荒木飛呂彦
漫画家。代表作に通算 100 巻を超える『ジョジョの奇妙な冒険』シリーズがある。王道かつ意外性に富むストーリー、独特の絵柄やセリフ回しなど他の追随を許さない作風により、現在まで圧倒的な人気を誇っている。

●PROFILE

三部けい
漫画家。日常、アクション、サスペンスなど幅広いジャンルにて活躍。
これまで手がけてきた作品に『テスタロト』『カミヤドリ』『パズル』『鬼燈の島』『魍魎の揺りかご』『STEAL AND DEAD』などがある。
『僕だけがいない街』は、自身の作品初のアニメ化となった。

松宮庸典
編集者。幾つかの出版社を経て、現在は株式会社 KADOKAWA に所属。
「少年エース」副編集長として作品に携わる。
三部けい氏の担当は『神宿りのナギ』に続き、『僕だけがいない街』が2作目となる。

アフレコ再上映（リバイバル）②

高木秀栄

『僕だけがいない街』シリーズ構成
岸本卓インタビュー

人間の心情をしっかり描こうというのは、本読みの場でも共有されていました

●PROFILE
岸本卓
「サイゾー」編集部、スタジオジブリを経た後、脚本家として様々な作品に携わる。代表作に『うさぎドロップ』『銀の匙 Silver Spoon』『ハイキュー!!』『プリンス・オブ・ストライド オルタナティブ』(いずれもシリーズ構成)などがある。

魅力的な原作だけど、映像化は困難だと思った

―― 『僕だけがいない街』が放映されて少し経ちましたが、まず実際にご覧になられた感想から伺ってもよろしいですか？

岸本　いやあ、自分の予想を遥かに超えたものに仕上がっていました。第１話を見て、この作品に参加できてよかったと、心から思いました。この原作は映像化するのがかなり難しいと思うんですよね。ともすれば、地味になってしまいそうで。それをここまで映像で引っ張れたのは伊藤さんをはじめ、絵作りに関わったスタッフの力だと思います。

―― 相当良い出来だと思えたんですね。ではそのあたりの詳しいお話は改めて伺うとして、まずは『僕だけがいない街』のシリーズ構成を担当されることになった経緯を教えていただけますか？

岸本　声掛けがあったのは、『銀の匙（Silver Spoon）』の脚本作業が終わった頃だったと思います。伊藤さんから「次の企画も一緒にやりましょう」といった感じで。

―― その時にタイトル名は出ていたんですか？

岸本　いえ、聞いていませんでした。正直、最初はかなりふわっとした話だったんです。社交辞令なのかオファーなのか、わからないくらい（笑）。そのあと、伊藤さんから直接電話があって「そろそろ本読みに入りましょうか」と。「あ、やっぱり本当にやるんだ」といった感じでした。そんなわけで、まず伊藤さんと飲みに行って、どんな作品にしたいかという考えを聞いて構成を立て、会議を始めるという流れでした。

―― そのあたりで原作を読まれていると思いますが、第一印象はどんなものでしたか？

岸本　サスペンス要素を強く感じました。“引き”が強いなと。原作第１話のラストは、クラスメートだった女の子（雛月）が死んだことを思い出すところで終わっていたんです。まず、そこが面白かったですね。「この子を救おう」じゃなくて、「死んだ」から始

まるところに衝撃がありました。全体に漂う重苦しい雰囲気も好みでした。ちょうどその頃、海外ドラマの『THE KILLING』をワクワクしながら見ていたんです。これはコペンハーゲンを舞台にした暗い、サスペンス色の強い作品なんですが、そういう作品性に惹かれていたんですね。ですから『僕街』は自分にとってとてもタイムリーでした。

―― その後原作を読み込まれて、印象に変化はありましたか。

岸本 子供たちの冒険にだんだんノスタルジーが喚起されて、秘密基地が出てきたあたりから、より面白さが増しました。第二ロケット点火みたいな（笑）。自分の子供時代と重ねて読みました。

―― 先ほど映像化するのが難しそうとおっしゃっていました。魅力的な原作ということなのに、なぜそう思われたのですか？

岸本 原因は二点ありまして……。ひとつはこの作品がサスペンスだということですね。テレビを見て誰が犯人なのか気になったら、漫画を読めばわかってしまうじゃないですか。

―― 犯人を追うだけなら、それで済んでしまいますよね。

岸本 ええ。テレビ放映時には漫画で犯人が明らかになっているので、犯人探しだけではない魅力を入れないといけない。二点目としては、アクションや萌えといったキャッチーな要素が少ない。

―― それは昨今のアニメ業界的には厳しそうですね。

岸本 伊藤さんも難しい作品を選んだものだな、と。でも、第１話を見て、完全に杞憂だったとわかりました。

―― 伊藤さんの中で「勝てる」絵が見えていた？

岸本 そうだと思います。伊藤さんの資質的にも、向いていたんでしょうね。地味さを補うために派手な要素を入れるんじゃなくて、ひたすら作品世界を突き詰めた先に独特の世界が立ち現れたというか、大作感がありますよね。伊藤さんはどこまで自覚的だったんだろう……今度飲んだときに聞いてみます（笑）。

遠慮のない脚本会議

―― 先ほどからお話に出ていますが、伊藤さんの印象はいかがでしょうか。

岸本 基本的にはロジカルです。最初に“これがこの作品のテーマなんだ”と背骨を通しておいて、全身の骨格を組み立てていく。そうでありながらも、各論においてはとても柔軟に人の意見に耳を傾けます。今回の脚本会議の出席者は、自分の意見をきちんと持っている人たちばかりだったので、伊藤さんもみんなのいいところを全部いただくというような感じだったと思います。ちゃんと会議に出て積極的に発言すべしと強制していたので（笑）。

―― 優秀なスタッフが集まって、議論も活発だったのですね。

岸本 ええ。会議で中心になったのは、僕と原作協力としてクレジットされている村上（泉）さんと、設定制作の渋谷（晃尚）さんの3人でした。村上さんは伊藤さんが連れてきたのですが、本当に大きな力になってくださいましたね。

―― 伊藤さん自身は議論の中心にはいなかったのですか？

岸本 それが面白くてですね……。伊藤さんの立ち位置が、他タイトルと違ってちょっと特殊だったんです。脚本会議というのは、監督が座って近くに脚本家がいる状態で、監督と脚本家が議論することが多いのですが、４回目ぐらいの脚本打ちの時に、伊藤さんが僕から一番遠いところに席を変えたんです。脚本を担当した僕や安永豊君が参加者と議論を戦わせて、そこで議論が出尽くして、最後に「どうですか？」と伊藤さんに判断をあおぐ形になりました。

―― 裁判長席になっているんですね（笑）。

岸本 ええ。大体村上さんが脚本に対して何かを提案して、それに対して渋谷さんが逆張りしていくというパターンでした。僕からすれば「ふたりともややこしいな」って感じでしたけど（笑）。で

も、非常に有益でした。その様子を伊藤さんが客観的に見て、頭の中で絵を組み立てて最終的にジャッジするんです。我々からすると理屈や想いはすべて吐きだして、お互いの意見のメリットとデメリットがすべて明らかになった上で伊藤さんが判断するので、納得できるんですよ。そんなふうに打ち合わせのシステムができあがっていきました。このシステムは、相当有効だなと勉強になりました。監督が自分でアイデアを出して、ライターと対立してしまうと、自分から出たアイデアについ下駄を履かせてしまう場合もありますし。

―― 脚本会議の内容そのものも、深いものだったのですか？

岸本 少なくとも、誰も遠慮するということがなかったです。ですからかなり稿を重ねましたけど、書き直すことが苦じゃないんですよ。直せば脚本が良くなるのが分かっていたので、むしろ全部自分の手柄になってよしよし、と（笑）。

―― 例えば原作側から「こうして欲しい」といった話が来たりはしなかったのですか。

岸本 この作品に関しては全くなかったです。むしろ変更するためのアイデアを担当編集の松宮（庸典）さんから出してくれたことも多々ありました。原作ではAとセリフを言っているけど、アニメでは少し状況が違っている。そういう場合、心境としてはBというセリフになるのでは、といった感じで。

―― それはアニメスタッフ側としてはありがたい話ですね。

岸本 ええ。当然松宮さんはキャラクターへの理解が深いですから、悟ならいかにも言いそうなセリフを出してくれたりするんです。

―― そこまで一緒にやられているのなら、原作側でオミットされた要素をアニメ版で使って欲しいみたいなこともあったのでは。

岸本 たとえば、8話の雛月と佐知子が一緒にお風呂に入るというエピソードなんかがそうです。漫画版は巻の終わり合わせで見せ場を持ってくるんですよ。「第3巻の終わりに、再びリバイバルが始まるというくだりを持ってくる」ということを構成の段階で先に決めておいたそうです。

―― 確かに、コミックスの終わりは毎回引きが強いですよね。

岸本 そうすると逆算で、入れたいエピソードが入らない場合も出てくる。でも、アニメにする場合はまた違う区切り方になっていくので、原作でできなかったことを入れられたりするんです。

第1話は出し惜しみなし

―― 脚本を書いていて苦労した部分はどのあたりですか？

岸本 苦戦した部分で言うと、やはり第1話ですよね。要するに昭和63年へのリバイバルまで第1話に盛り込もうというのが、一番大きかったです。原作の物量が分かっているので、アニメにするためにエピソードに対して尺をどのように割り振るかが問題になるわけです。どうせどこかは削らないといけないので、やはり第1話はラストの引きの美しさを取ろうと。

―― 確かに、非常に衝撃的な第1話でした。

岸本 視聴者の気持ちになると、「さあ新番組が始まった」と見始め佐知子が殺されました。さらに、ドーンと（リバイバルで）飛びました。そこで第1話が終わったら、さすがに「これは!?」となるでしょう（笑）。一番美しくてインパクトが強いのがこのかたちだと思ったんです。「第1話で出し惜しみはしない」というのが大事でした。このシリーズはこういう物語なんだ、このドラマを見てくれ！　と宣言するようなラストにしたかった。それを最終地点にしながらも、そこに至る道のりを単なる原作のダイジェストにせず、どっしりとしたドラマのままやるのが、難しかったですね。

―― しかし、アニメ版第1話のラストにリバイバルシーンを持っ

てくるのであれば、尺の調整が不可欠ですよね。

岸本　そうですね。ですから例えばそのリバイバルシーンの周辺についても原作をどう圧縮するかずいぶん悩みました。

――　原作では悟が逃げた犯人を追うという展開でしたよね。

岸本　その追いかけっこは尺を考えると難しいだろうと。そこで警察が来て、逃げるというかたちになったんです。初期の頃には佐知子が死んでいることに気がついて、その場でリバイバルするという案もあったんです。そこで「どくん！」だと衝撃的じゃないですか。でも、それだと第５話でリバイバルから戻った時に、警察から逃げる理由がなくなってしまう。

――　まだ警察が来てないですものね。

岸本　そうなんです。そこからまた逃げる段取りをやるとなると、まどろっこしい。ここは何稿重ねたことか。苦労しました……。

――　その他、第１話で調整した部分でいうと、どんなところが？

岸本　これは尺の都合ばかりではないですが、原作では雛月よりもむしろヒロミの死が悟の心に大きな傷となっていて、当時の事件を思い出すという構造だったのを、雛月に一本化しました。この作品の中心を雛月加代を救えなかった悟の後悔にしぼってシンプルにすることで、原作を削りながらもドラマが痩せないように工夫しました。それと切りたくなかったけど、オミットせざるをえなかったのが佐知子についてです。

――　第１話の殺害されるシーンで、佐知子の無念はとても伝わってきましたが…？

岸本　いや、正確にいうと佐知子の思いを悟が受け取れているかということですね。原作において、佐知子は悟に苦しい思いをさせないために事件から遠ざけ、大きくなった悟がそんな母の気持ちに思いを馳せるという一連のエピソードがあるんですが、そこは泣く泣くオミットしました。本当は拾いたかったです。

第５話にて。リバイバルから戻った悟は、自宅に警察が来ていることから逃げることを決意する

――　あのエピソードがあるから、悟はちょっと捻くれたような性格になっていくという話でしたよね。

岸本　ええ。佐知子が悟を守ろうとしたが故に、問題の根を深くしてしまったというのは、人間ドラマとしては非常に魅力的でした。

――　原作では、澤田が悟に「佐知子さんは、なりふりかまわず君の母親であろうとしたんだ」という話をしますよね。

岸本　それ以前にドラマとしての積み重ねをした上で澤田の話が成り立っているので、アニメでは全体的にオミットするしかありませんでした。澤田について言えば、逆に第６話での悟への説明は、可能であればもう少し圧縮したかったですね。

――　でも、そこは原作に比べると随分短くなっていますよね。

岸本　あそこで悟が情報をインプットしないと、悟はその後ヒントなしで犯人を追わなければいけないので、あれ以上短くするのは難しかったです。第８話で犯人が残していったものに対して、何も言えなくなってしまいますし……。でもやっぱり、説明がメインのシーンなので美味しくない。もう少し尺に余裕があれば、別の描き方もあり得たかもしれません。

―― 話を少し戻しますが、オミットした佐知子と悟の関係をクローズアップするなら、どのような方法があったと思いますか？

岸本 ふたりの関係をもっとギスギスさせていたと思います。たとえば、悟の母親への気持ちを「この人は結局俺を信じなかった人だ」という面で強くした上で、後に我が子を守りたかった母の気持ちを思い知るといった感じに起伏を作っていくとか。尺があるなら原作以上にそこを盛って、「お母さんとのいろんなボタンの掛け違いを含めてやり直したい」というようなドラマの展開もあり得たかもしれないですね。

―― しかし、その話をするのであれば、軸が一本増えるわけですから、とても尺におさまりませんね……。

岸本 そうですね（笑）。だからやはり、中途半端に残すよりオミットしたほうがいい部分だったのだと思っているので、後悔しているわけではありません。

「理詰めの謎解き」か「心情の対決」か

―― ここまで原作との違いを伺ってきましたが、最終回も展開そのものは違っていますよね。

岸本 インタビューを受けているいまの時点では、違うかどうかもわかりませんけど（笑）。最終回を書くにあたっては、かなり緊張しました。そもそも、原作の完結と放送の最終回を合わせるという作品は初めてだったので。続き物で、途中までで止めるというパターンも、すでに完結した作品を脚本化するというパターンもありましたが、原作を追い越しつつその結末を予想してアニメとしての完結に持っていくという経験がなかったので……。特にこの原作は様々な伏線が張り巡らしてあって、それを回収していく物語なので、余計困難でした。もう一つ最終回に苦労した原因を挙げるなら、特異な犯人像でしょうか。この作品の犯人は常人には推し量れないような動機で動いているので、いったい何を最終的な目的にしているのか、一筋縄では推し計ることができないんです。そんなわけで、最終話は脚本会議に出ている皆さんの知恵をこれでもかというくらい拝借しました。ほとんど僕はインタビュアーのような存在でした（笑）。

―― アイデアとしては結局どういうところを採ったのですか。

岸本 最終回をどうするかは、まず二つの方向性が考えられました。第一は犯人との知恵比べをメインに描く案、第二は悟と犯人の心情的な対決に時間をとって、そこをしっかり見せるか。僕は当初第一案の犯人の裏をかいて追い詰めていく「理詰めの謎解き」で行こうと考えていたんですが、脚本会議で議論するうちに、もはや理屈ではなく、心情の対決を描くべきだろうという意見が大勢を占めるようになりました。僕はけっこう謎解きにこだわっていたんですが、最終的に双方の主張が出尽くして、伊藤さんに判断を任せました。そうしたら伊藤さんは「心情の対決でいこう」と。僕としては、完全に納得がいっていたわけではないけれど、「伊藤さんがいけると言うなら、信じよう」ということで書き出しました。で、結果的には、「すみません。そちらが正しかったです」と（笑）。実際に書いてみると、最終回としての満足度という意味では、ギミックではなく心情に持っていくというのがやはり大事だったんだと、今となっては思います。

―― 最終回では、タイトルの「僕だけがいない街」についての解釈もある程度見えてくるように思えました。

岸本 あくまでも脚本を書くにあたっての僕個人の解釈で、監督や他のスタッフがどう考えているかは分かりませんが、アニメ版におけるタイトルの解釈については、真犯人と悟との“生き方の違い”を明確化するためにタイトルを機能させられればと思っていまし

た。後半、真犯人のある行動によって、悟にとっての“自分がいない街”、“自分がいない時間”が生まれるのですが、その間もみんなはちゃんと仲間として存在していて、悟のことを考えてくれていた。それがあったから真犯人との戦いにも勝てるかもしれないという流れになればと。「僕だけがいない街も、自分の大事な人生の一部なんだ」と。それが真犯人との対決においてズバッと明らかになれば、ドラマとして一番美しいと思いながら書きました。なんて偉そうに話してますが、こういったことも僕が一人で考えたことじゃなくて、伊藤監督を中心にみんなで議論を重ねて出てきたものです。

―― 今回のアニメ版の結末は、原作側との話し合いもあってのものなんですか？

岸本 三部先生からは、ラストがどうなるのかについて何度かお話を伺っていました。そうはいっても、先生は将来描く結末をガチガチに決め込まれるタイプではないそうで、その時点で持っている構想、アイデアの一部を教えてもらったという感じでしょうか。そこを11、12話でぎゅぎゅーッと悟と真犯人との対決に凝縮させていった感じです。ですから、最初に先生が思い描いていたラストの要素は結構アニメに入り込んでいると思います。とはいえ、先生とそのあたりの話をしたのはだいぶ前なので、原作はそこからかなり変わっていてもおかしくない。ただ、描写の仕方が違っていたとしても、「二人の対決」のエッセンス自体は上手く抽出できたのではと思っています。

あえて言葉にしないことが、ドラマを力強くする

―― 今お話いただいた「心情の対決」も然りですが、サスペンスとしてのギミックより、ドラマとしてどう成立させていくかということのほうを重視されているように思えますね。

岸本 人間の心情をしっかり描くというのは、本読みの場できちんと共有されていました。松宮さんから聞いた話では、原作としても企画当初に意識していたのは人間ドラマで、たまたまサスペンスの体をとったら、そこに読者が反応してくれたとおっしゃっていました。ですから、もともと原作も、ドラマこそが核だったんだと思います。

―― ドラマを補完する上で文芸的に面白いと思ったポイントとしては、自分は第６話の終わりと第７話のアバンが面白かったです。

岸本 それはどういったところがですか？

―― どちらも同じシーンであるはずなのに、違う見せ方をしていますよね。第６話の終わりは「愛梨に優しい言葉をかけてやるが、ふと犯人らしき男の目が見えて…ドクン！」。第7話ではその部分を「このままでは終われない」と切迫した心情を中心に描き直している。第11話の終わりと第12話のアバンでも、それに近いことをやられていると思うのですが。

岸本 第6話のラストでは悟の愛梨への心情に寄り添って終わりたいし、第7話のアバンではそこから始まる犯人探しのモチベーションが欲しい。みんなで話し合いながらさんざん悩んだあげく、だったら同じシーンだけど意味を変えてしまおう、となりました。けっこうな力業ですが、結果、良く見えたのであれば安心しました。

―― 他にドラマを中心に描くという部分で、心がけたことは？

岸本 例えば、キャラクターにはあまり喋らせないようにしました。モノローグもなるべく使わないようにしました。言葉にせず、間や仕草や表情でキャラクターの心情を描いた方が、ドラマとしては力強くなる気がします。まあ、それはサスペンスとして思わせぶりにするためにやったことでもあるんですが。この作品は、みんないい人に見えて思いがけない人が犯人だった、といったタイプじゃ

印象的な第6話のラストシーン。第7話のアバンでは同じシーンが別の意味性を伴って再び描かれる

なくて、こいつもあいつも犯人かもしれないし、みんな怪しくなってくる……という作品だと思います。ですから、登場人物たちが余計なことは言わずにじっと悟を見ていることで、サスペンス感を盛れればいいなと。

―― 脚本を書く立場からすれば、自分の作家性も合わせて原作より情報を足したいと思うものではないですか？

岸本 僕はそういうタイプではないと思います。言わなくても分かるところは、極力削りたいです。アフレコを聞いていても、もっと落とせばよかったと思うことがあります。

―― 例えばどういうところが、「落とせばよかった」と思えるシーンだったのですか。

岸本 第８話で、雛月が悟の家に泊まりに来るんです。そして朝を迎えて朝食を前に雛月が涙をこぼしたところで、「雛月にとって、この朝ご飯はテレビでしか見た事の無いものだったのだろう」という悟のナレーションが入るんです。でも、絵コンテを見ると演出が素晴らしいので、「ナレーションなしでも充分伝わるかも？」と思ってしまいました。もちろんそれは監督が決めることなので、最終的な判断は伊藤さんにお任せしています。

―― ここは凄く良いシーンですね。

岸本 というより、この第８話そのものがいいんですよね。僕が書いた話数じゃないけど（笑）。

―― ああ、安永さんの担当話数でしたね。ちなみに安永さんとの話数の振り分けというのはどういうかたちで？

岸本 方針と言うほど大したものはないんですが、第１話、第２話は取っ掛かりとして、アニメとしての方向性を決める意味でも自分が書いて、あとは３、７、８話を手伝ってもらいました。でも第８話に関しては、本読みをしながら「しまった！一番泣ける話数じゃないか！」って（笑）。つい、雛月を無事に逃がしきる第９話をひとつの決着点と捉えていたのですが、よく考えてみると実質的に目標が達成されるのは第８話で、９話はむしろ新たなる旅立ち的な意味合いが強い。原作の絵面がクライマックスっぽかったので、つい騙されてしまいました（笑）。第８話はオリジナルで足した部分も、思った以上に上手くいって、なんで自分で書かなかったのかと…まあ、それは冗談ですけど、いい話だったなあ…。僕も安永さんに任せたことで、かえって外から色々と意見を言えました。「グッジョブ！　安永さん！」です。

あの頃の自分と、踏み込めない悟へ

―― 映像化されてよかったと思えたところは他にありますか？

岸本 今の時点でオンエアされている３話までで言うと、まず第１話を観てびっくりしました。脚本通りなのに脚本よりもはるかに面白くなってる！って（笑）。心からライター冥利に尽きると思いました。第２話の冒頭で佐知子がハンバーグを作ってくれて悟が泣くところでもホロリときました。正直脚本を書いているときは、この

シーンで泣かせようとまでは思ってませんでした。だって第１話から１週間あいている状態で、第２話始まってすぐのシーンですよ。悟の心情を追うにしても、いきなり過去に戻って戸惑いまくって、慌てて家に帰って母親と会った直後ですから、ドラマとしてもそんなに積めていない。もちろん雰囲気を作っていい感じにしようとは考えていましたが、ここまで心を揺り動かされるとは考えていなかった。それは生活音が聞こえてきて、地味だけど繊細な芝居を積み重ねて、初めて実感出来るもの。脚本ではなくて絵コンテ、作画、演出の勝利だと思います。

―― 脚本と映像の大きな違いで言うと、声が入っているというところもありますよね。

岸本 やっぱり生身の声が乗るとリアリティが圧倒的に違います。悟役の満島（真之介）さんと土屋（太鳳）さんのお二人は、とても生っぽくてよかったです。作品の進むべき方向性としては、生々しさが大切だと思っていたので。でも、一般的に言って芝居の技巧と生っぽさを両立するのは至難の業ですよね。芝居が上手ければ上手いほど、意表をつかれるような生っぽさはなくなっていきがちなので。一番最初に悟の声のオーディション・サンプルを聞いた時は、ヒーローっぽいというか、主人公的な声と芝居の方が圧倒的に多かったんです。物語の中の悟はヒーローになりたいだけで、まったくヒーローっぽくないのに（笑）。こんなことを言っては失礼かもしれませんが、そんなわけで悟が満島さんと土屋さんに決まって、とても安心しました。

―― ちなみに、悟の役には生っぽさが必要という話でしたが、ご自身としては割と親近感を持たれていらっしゃる？

岸本 そうですね……最初の頃に伊藤さんが、この物語は「踏み込む」物語なんだとおっしゃったんです。踏み込めなかった人間が29歳までそれを引きずって生きてきて、だけど、踏み込むことにもう一回チャレンジできる機会を与えられた。さあ、彼は踏み込めるのか!?　というのが、この作品を映像化するにあたってのテーマだと。それで、今の質問なんですが、僕は元々悟タイプの人間だったんです。二十歳を過ぎた頃から、むしろ、ズカズカ踏み込む図々しい人間になっちゃいましたが、それまでは友達も少ないし、女の子に声をかけるなんて夢のまた夢ぐらいの感じだったんです。そういう意味では悟の気持ちはよくわかる。でも僕はある時、切っ掛けもなく、いきなり踏み込めるようになっちゃいました。たぶん、そのほうが人生面白いことに気がついたんでしょうね。とは言いつつも、踏み込めなかった十数年もとても大切だったと思います。何かを表現するための原料になる、ルサンチマンがすくすくと育つし（笑）。もし踏み込めないでいる悟に声を掛けるとすれば、漫画家になるためにはその悶々が大切なんだって言ってやりたいです。

岸本氏がホロリときたという、第２話、佐知子の料理シーン

アフレコ再上映（リバイバル）③

高木秀栄

『僕だけがいない街』
オリジナル・サウンドトラック 1

音楽：梶浦由記

TRACKLIST

01. only I am missing
02. show me your smile
03. discouraged
04. it was a quiet day
05. the mystery begins
06. deeply discouraged
07. I have to save her
08. the end is near at hand
09. carefree time
10. she was here, alone
11. she called her mother
12. revival !
13. reasoning
14. a taut state
15. trapped into the corner
16. a fugitive
17. an abuser
18. runaway from here !
19. another mystery waiting
20. run the race !

MUSICIANS

ALL Keyboards & Programming : 梶浦由記

Flute：赤木りえ
Oboe：石橋雅一
Electric Guitar：是永巧一
Acoustic Guitar：田代耕一郎
Strings：城戸喜代 String
Cello：堀沢真己

SOUNDTRACK STAFF

Sound Producer：梶浦由記

Producer：森 康哲(SPACE CRAFT PRODUCE)

Recording & Mixing Engineer：小岩孝志(SIGN SOUND)
Recording Studio：Studio SoundValley/Sound City

Musicians Co-ordination：須藤一男(HOT WAVE)
Score Support：石川洋光

Mastering Engineer：川元綾子(Sony Music Studios Tokyo)
Mastering Studio：Sony Music Studios Tokyo

Special Thanks
福地 慶(Halftone Music & Craft)
井本光紀(SIGN SOUND)
山田さおり(ブレイズ)
明智 権(Sound City)

解説

『僕だけがいない街』の映像に寄り添う劇伴音楽、中でもメインテーマ的な意味合いを持つ T01 “only I am missing” は印象的な悟のテーマ・モチーフから始まる。
本作での音楽は、映画音楽的なアプローチに基づいて、キーとなるモチーフをさまざまにアレンジし展開させていく手法がとられている。その中心にあるのが「悟のモチーフ」であり、ベルやチャイムをつかったシンプルで印象的なメロディだ。このモチーフからスタートし、ある曲では後半でサスペンスフルに、ある曲ではノスタルジックに、さまざまなアレンジが行なわれている。実に劇伴全曲のうち半分あまりで悟のモチーフが使われている。
もう一つ、本作の劇伴の特徴といえるのは、小さく静かにスタートし、後半でダイナミックな展開をする曲が多数あることだ。中でも太くて重いチェロの旋律がたたみかける T01、T05、T07 はダークかつエモーショナルな空気を醸しだしており、劇中でどのように使われているかにも注目してほしい。
また、サスペンスという作品の特性もある中で、劇伴全体としては抑制的なテンポやリズム感で統一されており、梶浦由記が得意とする三拍子のスタイルとも相まって「せわしない印象を映像に与えない」というコンセプトが貫かれている印象だ。この方向性は、少なめのカット数ながらセリフやナレーションを重視したアニメ本編の映像スタイルを見通してのものだろう。
『僕だけがいない街』は梶浦由記にとって、『ソードアート・オンライン』に続いての伊藤智彦監督作への音楽参加となる。そもそも原作コミックの熱心な読者で、音楽制作のオファーを受けた時点ですでに世界観やキャラクターを熟知した状態であったそうだ。原作・映像との幸運な出会いから生まれた音楽世界を、このサウンドトラックで確かめてもらいたい。

PRODUCT STAFF

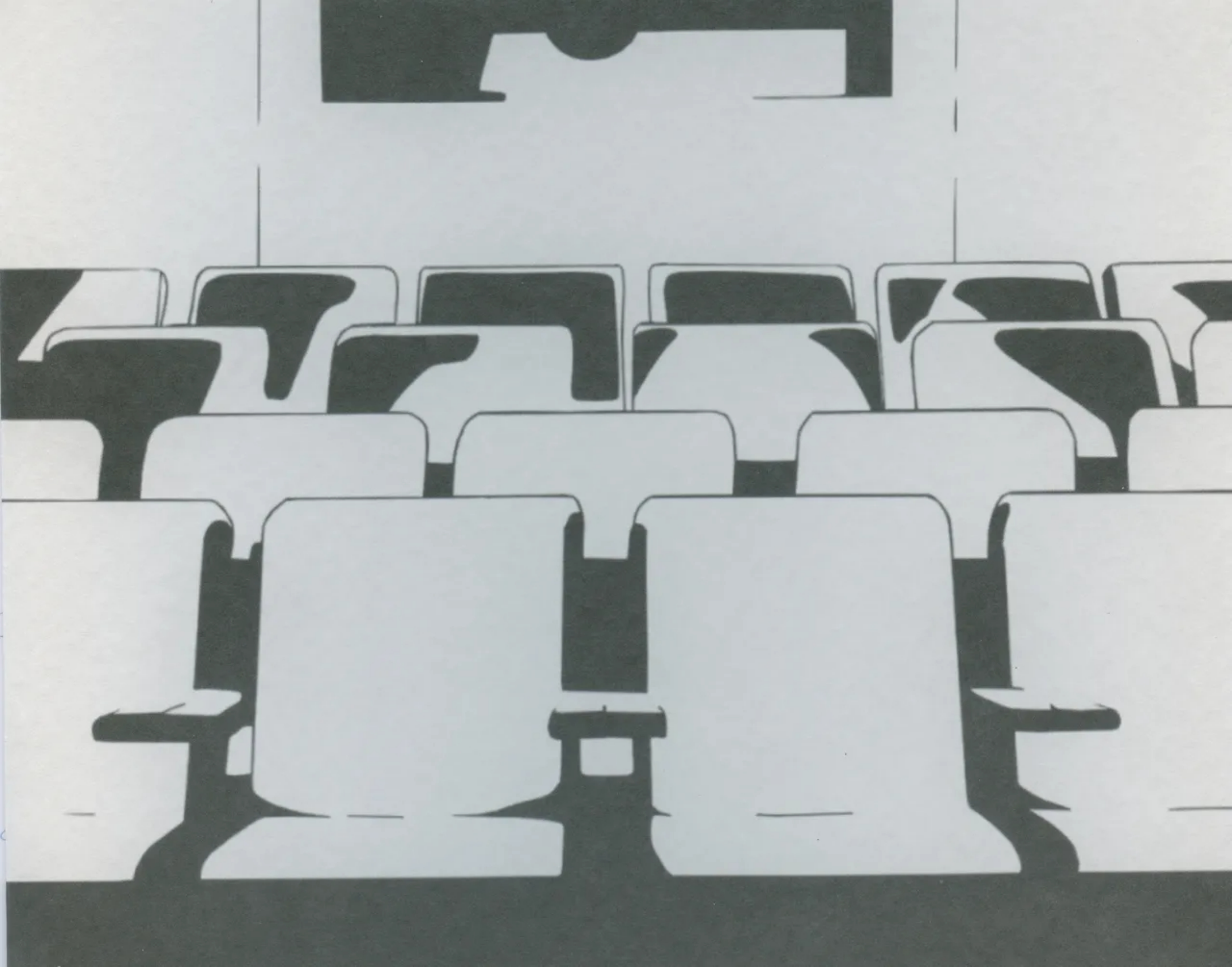
グラフィックコンセプト&デザイン：**星野ゆきお**（VOLARE Inc.）
ブックレット構成&ライティング：**武井風太**
ブックレット監修：**村上泉**
編集協力：**松宮庸典**（KADOKAWA）・**木下康介**（KADOKAWA）

オーディオコメンタリー構成：**古川耕**

オーサリング進行：**佐々木初美**（Q-tec）
オーサリングコーディネート：**内野義昭**（Q-tec）
Blu-ray&DVD メニュー制作：**栗原一郎**

プロデューサー：**鈴木健太**
宣伝プロデューサー：**相川和也**
宣伝：**高橋里美**
セールスプロモーション：**神宮司学**
ウェブプロモーション：**深田優作・紀伊恵美**
プロダクトコーディネート：**内藤あづさ・水野智絵・柳瀬陽子**

スペシャルサンクス：**三部けい・伊藤智彦・岸本卓**
岩田幹宏・賀部匠美・藤田祥雄・渋谷晃尚・高村江美・田澤香織

三方背 BOX イラスト：［原画］**佐々木啓悟**［仕上げ］**佐々木梓**［特効］**青嶋俊明**
デジパックイラスト：［原画］**佐々木啓悟**［仕上げ］**佐々木梓**［背景］**長谷川弘行**［特効］**青嶋俊明**

ANZX / ZB12041
©2016 三部けい / KADOKAWA / アニメ「僕街」製作委員会